

川柳塔

昭和五十三年八月二十五日印刷
昭和五十三年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六一六号



日川協加盟

No. 616

九月号

高橋操子川柳句集

「千亀利」刊行記念句会

日 時 昭和53年11月23日 1時開会
 会 場 ロイヤル宮殿

(電話0724-1155番)

南海本線・岸和田駅下車、または
 国鉄阪和線・東岸和田駅下車スグ

柳 兼 柳 兼
 話 題 「袴」 橋 高 薫 風 選
 「和服」 若 本 多久志 選
 「仕入れ」 菊 沢 小松園 選
 「のれん」 榎 本 聡 夢 選
 「展示」 川 村 好 郎 選
 「絹」 西 尾 栗 選

席 題 (一題・当日発表)

謝 辞 高 橋 操 子

賞 費 (秀句に呈) 各題二句

会 費 千五百円(句集・記念品呈)

懇親宴 二千円(同会場)

主 催 岸 和 田 川 柳 会
 後 援 川 柳 塔 社
 岸 和 田 文 化 協 会

★懇親宴準備予定のため11月15日までに

☎596岸和田市土生町一九八九一八

(電話岸貝局0724-0049番)

高橋操子方 岸和田川柳会へ。

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
 近鉄(アベノ店・上本町店・奈良店)
 京阪モール なんば新川店 虹のまち鹿鳴
 中之島サン・ストア 淀屋橋サン・ストア
 南海難波駅構内店

大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

天 神 祭

船渡御に席賜わって老夫婦

大かがり火燃える向うに遠花火

御座船の鳳輦浮かぶこがね色

これはこれは脚下に拜む橋の群

御座船の威儀尊く暗に映え

火と水のまつりとも、光の絵巻ともいわれる豪華極まる大阪の天神祭は、今年百二十万の人数と報ぜられた。私共夫妻は、念願叶って学友川島長雄君のご厚配により、天神橋北詰から出発する実信講の船渡御に乗船を許され約二時間余心ゆくまでに一生一代の榮譽を満喫することが出来た。私の古里は九州の一寒村であるが、町名を天満町と呼ばれる事でも判るように天神様の氏子である。大阪に住みついて五十年余になるが、船渡御は初めての経験である。二時間半の感激は、われわれ老夫婦にとって一生忘れられぬ思い出ともなり、冥土への土産断ともなるであろう。しかし、味をしめたと云っては失礼だろうが、帰宅後川島君に、来年もおたのみすると電話するあたり、若者に負けぬハッスル振り。その晩の冷ビールが格別であったことは勿論である。誘いだしてくれた川島君に対してはお礼の言葉もない。

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 九 月 号



座右の句

しあわせな家年寄りがよく笑い

(春果)

私の句

子守唄音痴の父を笑うまい

吉原 紅月

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

天神祭	中島生々庵	(1)
おかし味ということ	八木 摩天郎	(2)
誹風柳多留廿五篇研究	清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮 鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫	(21)
川柳塔 (同人作品)	西尾 棗	(4)
水煙抄	正本 水客	(30)
俳諧誕生の系譜	東野 大八	(23)
秀句鑑賞	黒川 紫香	(25)
(同人吟)	西田 柳宏子	(41)
(水煙抄)	橋高 薫風	(42)
愛染帖	橘高 薫風	(42)
53年度 二賞中間発表		(28)

多久志・薫風・好郎・水客・棗・小松園・形水・紫香

おかし味と

いうこと

八木 摩天郎

昭和十八年二月、曾我廼家五郎が、「千利休」の執筆に就いて、と云うパンフレットを上梓した事がある。今、緋いて頁をくぐる中に喜劇王五郎が「おかしみ」に就いて書いていた。それを茲に転載すると、

凡そものはそれを主観的に眺める場合と客観的に眺める場合とでは、その感応の転動する場合が多い。一つの例として白痴を子に持った親がありとすると、その白痴はこの親に取っては悲劇の主人公であるが、他人たる第三者側から眺めるとそれは即ち喜劇の主人公となる。笑いの種、悲しみの種は斯くちがう。五郎が五郎劇を自作自演する場合「おかしみ」という事の大切な事について研究もしていた。

ところが先般「利休第一編界の巻」の上演に際し、ある雑誌の劇評に、「喜劇のおかしみを一外人ベルグソンは形のおかしみ、運動のおかしみ、状況のおかしみ、言葉のおかしみ、性格のおかしみに分けて、千利休の喜劇的要素は「切り替えのおかしみ」とでも云うのたろうと劇評していた。しかし、五郎は五郎自身、お客様に退屈の無いように幕切れまでもってゆく。自笑と微笑、これで泉州界に

路郎選古川柳の味	八木 摩天郎	(45)
常任理事会余聞録	P・H 生	(41)
雅号ぶっちゃけばなし	大山と金	(53)
柳 信	直原 七面山	(51)
初歩教室	本田恵二朗	(50)
大萬川柳「きっかけ」	川村好郎選	(52)
柳界展望	本社八月句会	(54)
各地柳壇(佳句地10選)	(庸佑・整理)	(56)
「長 寿」	大坂 形水選	(61)
「一路集」	林 瑞枝選	(48)
「稲」	村上春巳選	(48)
「釘」	直原 七面山選	(49)
編集後記	(一三夫・葉子)	(67)



生を亨けた自分は一世の茶聖宗易居士を追慕するのは、茶人としてではなく、利休の宗易なる日本精神を茶道に示された人格にあこがれての演出であると云う事を累々その点述べている事が判る。

ここに於て、かつて麻生路郎師が其著「新川柳講座」に可笑味(おかしみ)を説明するのに三人の人間の内、一人の顔は長くて馬面をしている事が、おかしかった。そうした思いがけない共通点を発見した時に人間は可笑味を感じる。これは形の類似から来る可笑味である。

例えは古句に、
神前の鈴ふんどしのとけたやう
と云うのがあるが、これなどは、あきらかに形の類似から来た可笑味を捕えたのである。
それがしも罷歸ると芸子しゃれ

鶏があくびをしたと囃いひ

同じ古句で、鶏が関の声を告げているのを囃の悲しさからあくびをしていると感じているところが可笑味がある。同情すべき事象にぶつつかって、感動した可笑味である。

守りれもるともチボにとられたり 豆 秋
食堂の鏡三人俺が食ひ 艸 菜

可笑味の句でその的が外れると、多くは俗に云うくすぐりの句、鼻持ちならぬ句となると路郎師は教示していられたのを追懐して、一代の喜劇王、私と同郷のよしみ、五郎実妹が、本年死ぬまで、私の借家だと頼んでいたそれだけに実妹からの最後の贈りもの「千利休」の執筆五郎稿はそれだけになつかしい思い出である。

川柳塔

西尾葉選

松原市 谷垣史好

昼の月誰かを尾行したくなる
無駄口は薄いコインの音に似て
碁を打ちに行く囁託もあるのなら
八月の博多人形病んでいる
見てはならない虚無僧の顔
口笛を吹いて人生拗ねている

役人になって覚えたつまみ食い
ライバルの素質をほめて試合待つ
生まれたも死ぬのも何かのはずみです
金策がついた夕餉の高笑い
南瓜も実篤風の自家菜園

大阪市 本多柳志

愛媛県 渡辺曉童

羽織袴も きつい御無沙汰
祝を受ける 顔は仙人
冬も浄上は 蓮や水蓮
出たとこまかせ旅の角瓶
老いてますます 円満を欠く
特技皆無の 毒舌の雄

口だけを出して虚ろな会議室
議長席右派と左派からささやかれ
装訂に釣られ書評に騙される
働いたうまさを掬う冷奴
傷跡が秋まで残る山の恋
匿名にしては読ませる投書欄

東大阪市 市場 没食子

大阪市 西森花村

付き合いで飲んだ僕だけ宿酔

妬ばた焼き子供もつれて戻り税
愛煙と嫌煙兄弟左党でも
あっちむいてはいあんだの負を孫覚え

死黒子人の目につくところで殖え
順が来て不粋な寮歌それが受け

川西市 戸田古方

生きるため殺したのだと悪びれず
ちよっぴりと懺悔海豚の供養塔
筋骨の名は知らないが脹らんで

ノースリーブ鎖骨少おし見えすぎて
SFを読んでてそんなにおもしろいか

竹原市 山内静水

一歩前に出てから恐くないパンチ
峠の地藏へ続く道普請

バスタオル使うしぐさも女の児
スタイルは足が短いだけの妻

ビールびんに栓する父のいとおしく

倉敷市 水粉千翁

この雨にせめて濡れたいわかれ道
二人三脚また起きあがる疵を撫で

竹の青泌む墨痕の香をはなち
煩惱を断つや茶筌の弧にのせて

行雲流水の心に遠く筆奔る

今治市 月原宵明

順番と言うて明治の背なを押し
新世帯お金のことにまだ触れず

LLに十九の春もあつた妻
換気扇土用の丑の日を儲け

自動ドア開けっ放しの立ち話

今治市 長野文庫

すぐ挫折余白へ自嘲しきりなり
用心をせよスリでなく車事故

胸を借るつもりと試合前の嘘
朝だけはゆっくり食べる小あきんど

只酒を契めてチャンスつくる気か

八尾市 高杉鬼遊

みずうみのみどりへ誤解沈ませる
政治家とにらめっこなら負けはせぬ

空風呂を焚いても左遷できぬ妻
権兵エの法事で水車休ませる

下町のてのひらに乗るぬくい銭

大阪市 不二田一三夫

屑籠の中へキヤリア溜めていく
して貰ったように 好きな本買ったまえ

ルビが読めぬ校正用の目がいとし
家庭まで乱せませんと逃げられる

詩心ないのが名づけた嫌煙権

尼崎市 黒川紫香

暑うおまだけで大阪すれ違う
適材適所なんて左遷とは云わず

酔っている影溝へ落ち溝へ落ち
露天風呂前の峯だけ陽が残り

三枝程落し植木屋茶を呼ばれ

高槻市 若柳潮花

改築へ歴史の色が消えてゆく
踏みしめる足全快に近い音
爪弾きの小唄でも切る三の糸
白川の流れに影を置く浴衣
人嫌いもう生垣は秋の花

岸和田市 高橋操子

即仏心財布をはたく手が踊る
なすきゆうり 自家菜園の朝のつゆ
菜園で咲いた咲いたはなすの花
こんぶ切るはさみはちびた方を選び
記念植樹その一くわへする拍手

青森市 工藤甲吉

寝たきりも長寿の中に数えられ
あの世千日この世一日飲むとする
青柿がポトリ水子を想わせた
寝ても起きても甲子園甲子園
緑蔭にそれはたのしい漫画本

和歌山市 野村太茂津

口八丁手八丁銜いが少し鼻につき
遠い日に戻して無口恙なく
弁えぬ若さへ足枷は嵌めておく
過ちを正す拳はふところに
少し弛めて別の手綱を締めてみる

大阪市 金井文秋

有り余る米を美容に嫌われる
情熱も中ぐらいいなりカンナの黄
会長が酌ぎに廻った顔合せ
黒と黄を着こなし女豹らしくなり
類似品に注意と贋の方も書き

大阪市 河野君子

ハート型のゼリー冷たく彼を待つ
風鈴にたしなめられてる膝頭
ぼつねんと桔梗真昼の瞳に活きる
赤ペンよ暮しの手応えありすぎる
歳月を教えてくれる十指かな

大阪市 小出智子

西瓜割る時の期待が今もある
何をうろたえて齢など隠すのか
いつからか紺を私の影にして
夕立去る人に別れがあるように
日曜日の男を女女しいとも思う

島根県 堀江正朗

働けばさほどでもない暑さかな
心貧しいときは風鈴ものうくて
想い出を語れば愚痴にとられそう
妻の手がはずんで孫へ荷が出来る
うすれゆく記憶のなかに花の朱よ

島根県 堀江芳子

育つ孫を写してあげたい夫の瞳
秒針の同じリズムで胸を刺す
初桃の紅うっすらと掌に親し
むかし昔の知恵そのままに梅漬ける

泉佐野市

阿 萬 萬 的

小京都銘菓とそばと酒の味
汐の速さを画にして海峽陽が沈む
海は天才海蝕洞を波が打つ

過疎じつと見つめる漁村の常夜灯

敬語つかう自分が小さく見える日よ

桜井市

岩 本 雀 踊 子

善人の目があきらめをためている
落ちついた父の姿にすぐわれる
すき持たぬ男の話など聞かぬ
云いわけを先に善人してしまふ
血縁のこうさにあつた胸騒ぎ

倉敷市

小 野 克 枝

反対をしていた筈の思いやり
世渡りのこつを知らない汗を拭き
姑の背に老後の吾を見る思い
母ごろも付け下げ安く云うて買ひ
ぼんやりの母で浴槽また溢れ

兵庫県

遠 山 可 住

せっかく来たんだ拍手しておこう
売名の看板ながら位置がよし

入道雲父がおどけているような
石ころのルーツ川瀬の私語となる
うみねこに同情された片思い

大阪市

川 口 弘 生

海百合の化石が語る飛弾の秘話
海紅豆 椿の駅の待ち焦れ
生きのびるカマキリの雄だつて居る
一粒の砂で風紋の中に居る
何番目かの駅で必ず降るされる

米子市

八 木 千 代

マネキンの胸に値札のつくさだめ
稀少価値驕りになれる日がこわい
オルゴール拗ねることさえ許されず
母の鈴鳴れば白磁の胸となる
大山の影ふるさとに逆らえず

米子市

林 瑞 枝

人を知るスケール角度を変えて見る
極楽の切符は生きてるうちに購う
しおらしい嘘で答えて手に追えず
的少しはずし奇麗に立ち廻り
遠ざかる靴音青春のながい夢

岡山県

嘉 数 千 代 香

不況風知らぬ男性化粧品
美容食などと七十才もおんな
道掃いて秋のささやき聞いている

主義主張通したペンが錆びてくる
色目鏡はずせば倅せがこぼれ

倉敷市 野田 素身郎

上役は老眼鏡などいらぬ歳
考えるポーズで回転椅子眠る
談合成立料亭の灯が消える
少々の無理は聞く気で出る 酒席
嫌煙権を言うより君も吸いたまえ

倉敷市 田垣 方大

小走りになるから娘見つめられ
端然と色気を出してお師匠さん
忍従がまだ残ってた坐りだこ
集団になれば男もよく喋り
信念のとおり生きてまだ無名

東京都 山根 白星

婦人帽一味違う自負を持ち
貧富の差あり内角の和は同じ
無然たり年はもゆかぬ恋の唄
生き急ぐゆえん僅かな持ち時間
精神の鍵を外したしのび逢い

西宮市 島居 百酒

恥らしいの無言は女の狡い武器
出直しの渡世に肩書云うとれず
子に賭けた般が丁半喰い違い
TVの手相占いと比べてみ

風いれる縁へ新茶のさわやかさ

東大阪市 落合 思月

祝い酒折目正しく飲まされる
食うにことかかず小皺が気にかかり
横座り女さりげなく誘い
ガムシヤラに亡夫が恋しい秋の雨
物尺を変よう誰れもついてこず

大阪市 中川 滋雀

石鎚山一步が重い行の汗
ホラ貝のこだまに鈴のシンフォニー
目を伏せたイエスの背筋裏切れぬ
新聞休刊昨日の予告確かめる
お茶かえて話のつぎほ探ぐられる

富田林市 和田 維久子

人生の悲劇を喜劇にした手なみ
遠ざかる足音友情の素顔見る
ワシントン世界を動かす震源地
生きがいの答は明日と云う日あり
奥深い所から出たつぶやきで

新宮市 大矢 十郎

敬老の二字を守って長寿国
同権を女たくみに使い分け
人妻を褒めたばかりに不味い飯
ツアーウトツーストライクの朝を出る
事務員も社務所は神に仕える身

竹原市 小島 蘭 幸

仲間外れの児も被っている野球帽
白旗を掲げ言いたいことがある
自転車で夫婦は海へ行く若さ
ガッツポーズが絵になるドラマだってある
一匹の蟻に親近感をもつ

西宮市 藤村 ベ 女

我が主張美事に通ってから空虚
さりげなく別れたあとの揺れる胸
茜雲ふっと逢いたい顔が浮き
裏切りの後ろめたさへ花を買う
包装紙きちんとたたんでお婆ちゃん

西宮市 若林 草 右

投げ出せば明治が残る座りだこ
立ち寄らば大樹の陰が枯れかかり
なめくじのハイウエー白く光ってる
割箸ごときに入歯の数をよまれたり
食うだけが命 毛虫の音をたて

八尾市 大路 美 幸

向き変えて得心をする姫鏡
灯明の前に弱虫うずくまる
妹も従兄弟も老いて仏の間
限りある命へ踵浮いてくる
ゆっくりと雲は流れて忌が明ける

八尾市 高橋 夕 花

誕生日心に白い鶴を折る

花の塔仰いだ日から夢をみる
一本みちで触れたえにしを温めよう
いやあーな私ごとび出しそうで空を見る
きのうも今日も軽い科から遁げられぬ

大阪市 江城 修 史

会者定離心にしみる流れ星

投げられた言葉へ善人うろたえる
思い出を拾い集めて老いの坂
労わりを呉れたあの日も過去となり
言葉崩しても師弟にあるモラル

竹原市 森井 菁 居

ピヤガーデンで小さな決意整える
墓地の雨むかしむかしを虹にする
酒飲んでみたら案外ひらめくか
身のほどを知ってヤドカリ出しやばらず
切り札のナイフは錆びた方がよい

松江市 中川 晃 男

ピルの角曲ると会える天守閣
流れくる読経夾竹桃真っ盛り
スーパリーのパックで母の味を売る
意気だけを褒めて末席へ注ぎにくる
早よ死んどいてようおました落語の大師匠

松江市 小林 孤呂二

感謝されていたとは一枚の葉書でも

役人根性一米先は見抜けない
娘と対話いよいよ父を古きとす

昭和ひとけた無鉄砲を懐しむ
男が拗ねると片割れ月がでる

和歌山市 津田与史

晴天の露歴孫が結婚す

素直には伸びずへチマは嫌われる
棚ボタと言う経験にまだ会えず

ゆっくりと歩いているのにけつまずき

老軀出勤カンナ赤く赤く燃え

和歌山市 垂井千寿子

修整の写真で黒ワク笑ってる

ブルドーザー民話を削る音続く
続く者有るを信じる数珠を持つ

御近所が次第に遠くなる栄え

補習器の命祈りの目を集め

和歌山市 松原寿子

別れたくない日の釦もてあそぶ

遮断機を下せばいっそうつの思慕
スカイブルーは貴方へ続く愛の距離

悟り得た素顔を裁く海の蒼

自我の彩雨に濡れてる紫陽花で

和歌山市 西山幸

月曜の不機嫌を知る定期券

蛟緋に母の童話が棲んでいる

今日も雨花の素顔にある疲れ
絹糸の奢りが指を悲しませ

兵庫県 河原みのる

あちら立てればこちらが立たぬ核の傘

国策の本音農家は邪魔なもの
雑草の強さをほめて抜きにける

憎いあいつやがては死ぬぞだが俺も
としよりに忘れるという権利

岡山市 川端柳子

人間には成っても人物には成れず

夏風邪も幾年振りかとなつかしく
詮索は止めてとも角めでたがり

うれしさを抱いて眠れぬ夜もある
澄み切った水底太古が見えるよう

(山陰旅行) 守口市 野呂右近

生き生きとやはり紫陽花雨の花

悪人の死でも拍手は許されぬ
雨音を聞くに頼りが仕度くなる

美しい言葉で息の根を止める
背伸びした足をローンに掬われる

大阪市 那須鎮彦

懐ろに辞表をのんだ自己主張

口喧嘩平常心の父が勝ち

俺の子にオレのいろはがもう古い
兄嫁が居心地のよいお茶にする

野次馬が一つ勉強して帰り

八尾市

納

糸葉

金魚屋の声はとどかぬビルの窓

十字切る爪は自然の色ならず

浮世絵の美女も肩ぬぐ暑さかな

薬局も酒屋も団扇くれぬなり

バラの未練昨夜の露をはなさない

島根県

飯塚

虎秋

相槌をうって金出すはめになり

待ち合いに公務繁多の灯がとぼり

スト馴れてその頂上を見失い

島晴れて長寿の村のおけさ節

嫌なやつ向うの顔もそう思い

大阪市

文川

一念

涙ともつかぬ喜び嘯み締める

忘れたい時に糸引く雨がふる

ラッシュ時は夏の女に近づけぬ

義理の二字ばかりかすところに生きている

一人だけ声出している会議室

富田林市

板尾

岳人

少年の母の心に山がある

少年の拳は山の鬼知らず

少年の帽子にかくれる滝の水

少年の飼う文鳥は山へゆく

少年の万年筆は山を画く

大阪市

大坂

形水

コンサルタント指折りばかり例に上げ

そろばんに合う合わないを言うのとれず

小企業古いそろばん捨てきれず

親も娘も心弾まぬ見合いする

句集刊行

家もよう建てず貧しい句集一つ

鳥取市

河村

日満

咲き競う花の名などは知らぬ父

職退いて父の日課となる昼寝

風船に父の肺活量強し

柳誌きたときだけ炎える老いの詩

倉吉市

奥谷

弘朗

金星の流れる汗へマイク向け

のんびりとしているようでもツボを突く

指切りに甘いお爺になつて

農政に方針のない米作り

島根県

藤井

明朗

人出の中の妻の手を離されず

旅人の一句のこして城下町

雷の不機嫌人間さまへ落ち

招ばれてる茶席は汗の味となる

松江市

柳楽

鶴丸

カラオケで夢の方程式が解け

福祉行政のエア・ポケットに父子家庭

高ければ高い程ファイトわく山男
ビールのおわだけのをむ嬢天下

鳥取市 小林 由多香

すんなりと行かぬ顔ぶればかり寄り
涙もろい父です母です平和です

雲低う雨の砂丘たそがれる
同窓の社長に定退拾われる

宝塚市 傍島 静馬

歎異抄ありがとなるまで目が持たぬ
脱ぐまでは挺でも動かぬはずでした

赤鉛筆負け馬ばかりに印つけ
別口を保留しといてプロポーズ

藤井寺市 西 いわを

路郎の忌生田花朝の語り草
七夕の夜は星座の睡みごと

霧這うと見る稜線は雨上り
約束をします言葉に針刺さる

藤井寺市 児島 与呂志

夫婦だけの話夫婦だけわかり
人は人信じ合える人である

堂々と主張する愛変えられず
彼の目が死んだからなつかしむ

八尾市 香川 酔々

招介が済むとおしゃべり雀たち
駅前を歩く光陰矢のごとく

湯の宿の床の間に置く捕虫網
偽りの流れに育つ水中花

八尾市 宮西 弥生

ハンカチの白い誓いにウソがない
少年の恋は青い実のまま

戻れない道と知るから灯をともし
女川に溺れる女で泣き上手

富田林市 岩田 美代

三度目を振り向き未練の限りなし
忘れると言う言葉をやっと思ひ出し

それからの舞台まわってひとりぼち
倅せな女軽い言葉で傷がつく

島根県 小砂 白汀

マイホーム背負い葉末のかたつむり
だがしかし鉛筆削器ちょうほうな

削られた山の土止めをカラスが唾う
双方に未練があつて糸もつれ

大阪市 山川 阿茶

かくし芸下手はジャンジャンやりたがり
ひとり居へ祭の料理とどけられ

大文字何か淋しい帰り道
宵祭り親が見染めた浴衣の娘

大阪市 神谷 凡九郎

やっぱり女やったんヤトウトウ嫁きはった
御自分の生命だけが大切なんじゃないですヨ

本人が真剣なんで笑えない
大病もイイネ生命と会話して来たヨ

堺市 藤井 一二三

(安宅・永大で銀行苦惱)

ザマ見ると銀行へ言い借りている

土の香を撮りたく旅の宿に寝る

駅前が展げバス停追い出され

風鈴の音が父になり母になる

京都市 松川 杜 的

喜寿うれし祖母に詩吟の趣味があり

宣長の心になって土鈴振る

かたつむり笑うな六十路の男坂

星の本、それから夜空が好きになり

下関市 国 弘 半休門

自信の子暫らくそっとしておこう

汐時を見て帆立貝磯に降り

若き日の足踏み長寿でとり戻し

焼け山の償い春を待ちたまえ

神戸市 中 村 ゆきを

母が来て夏草の庭よみがえり

朝のコーヒー始動のペスがすべり出す

なんで姑おこらはんのか分らぬ日

洋皿に遠いお国のサクランボ

大阪市 天 正 千 梢

イミテーションの暮らし疲れきつすぎる

寶石一つ買えぬ暮らしの笑い声
昭和元禄心のこもったものに飢え
双眼鏡のぞけばあちらも波が立ち

寝屋川市 宮 尾 あいき

濃緑のマリモあかん湖悲恋抱く

霧の摩周湖客へイメージくずさない

恋が欲しくて黒百合の種を買う

道に迷うて札幌の雨に逢い

松原市 玉 置 重 人

胃を切って犬の食欲じつと見る

真心を嘘に託しているある日

中段に構え常識のぞかせる

煩惱は捨てねばならぬ高野杉

出雲市 原 独 仙

美しくありたし異性の居る限り

茶柱へ信を求めて祖母ご機嫌

ぎりぎりの線まで露出招く罪

世界一長寿の国の中にわれ

氷見市 関 美 子

愛して愛して走って走って女の手錠

出直しのきかぬ人生主役われ

漁網かがる海は終身雇用主

十月の蜂は悲しいはぐれ蜂

樞原市 岩 井 本 蔭 棒

泣き声が今も行年二才の碑

赤字黒字地球の回転異状なし

夕涼み一年ぶりに仰ぐ空

習性のかなしさ薄く剥くまくわ

鳥取県 鈴木 村 諷子

母の日のなかった頃の古手函

兄の嫁弟の嫁となるえにし

言うやよし夫のそばに行くという

女房が留守の淋しさ音もせず

大阪府 室 谷 徹 舟

よだれかけ替えて地藏にするざんげ

制服と一緒に肩書きとる浴衣

人間よ悟れと現世も蓮の花

人様に通じぬ俺の物指しか

倉敷市 稲 田 豊 作

朝から欠伸して贅沢な余生

螢火のように光った遠い罪

確信のない返事です付焼刃

忍従の道がブーツに可笑しくて

呉 市 榎 田 英 詩

三つ指の指の白さに茶を貰い

片減りは靴のみでなし齢を知る

秀才はよいが過保護は色白で

腹割って話せば味方になる人

伊丹市 榎 谷 寿 馬

カラオケへ必死にしがみつくと過去か

結婚式既に鬢という嘘が

舶来の風邪と承知の玉子酒

あさっての太陽までは考えぬ

大阪市 津 守 柳 信

じっと居る努力を笑う梅雨晴れ間

病中へ料理番組目だちすぎ

健保料払うて油断の風邪を引き

つきはなす愛を世間に教えられ

鳥取市 両 川 洋 々

裏切りを恥じる日サングラスが重い

ゲンコツで拭う涙に嘘がない

真珠にはなれぬ涙を人魚拭く

駆け落ちの星か銀河を二つ外れ

大和郡山市 森 田 カズエ

熟しすぎばかり喰べてる果物屋

ペン先きへ滑べりが悪いうら帖簿

PTA妻雑音も持ちかえる

突然に来ても嬉しい里の母

神戸市 仲 どんたく

生命の限界まで盆栽刈込まれ

濁水へ亡霊のごとダムの底

美人型のまんまで刀自の齢の皺

老妻との接点めしと洗濯と

堺市 高 橋 千万子

辻褄が合ってるウソの苦い酒

風鈴の景品アパートそらぞらし
矢もたてもたまらず書いて投函せず
傷口をふやす再起と気がつかず

東大阪市 齋藤 三十四

調停が鎖を切つて丸くする
十戒の道の一つにけつまずく
答えなどいらぬ互の手の温み
岩風呂の今日の俺は床柱

和泉市 西岡 洛 醉

貧乏に馴れ雑踏に馴れ五十路越す
朝露に草木は生きる話する
台本に忠実凡人域を出ず
逢える日の紅は濃い目の鏡閉じ

米子市 石垣 花子

手伝う気娘はもう時計はずして
あすの雨こめかみが知る更年期
最敬礼して集金人麦茶飲み
手をつなぐ園児貧富の区別せず

平田市 久家 代仕男

いさぎよく散れば詭いと指摘する
菖蒲園ひと雨欲しい色で咲き
母親の慈悲に甘えて不仕合わせ
賢母には少し至らぬ嫁で無事

笠岡市 松本 忠三

女房の髪染めようが染めまいが

梅雨明けて降らねば降らぬ愚痴が出る
遅刻した奴が話の腰を折り
言分けへ女房毎度の顔で聞き

倉敷市 小幡 里風

ヘレテキでも奢つてやらう戻り税
仲裁が来てトラブルがなお連れ
下手に嘘ついて心配ひとつふえ
満ち足りる俵せ麦茶冷えている

大阪市 河井 庸佑

サイドビジネスその実益に欲を出し
親しさにひびが入った非常識
常識が無くても結構生きていけ
ペランダで四季折々の花が咲く

米子市 小西 雄々

ライバルへ肌のたるみが気にかかり
寝たきりの長寿へ喜びなど言えず
お茶席でお嫁にはしい娘にみとれ
混浴の情緒へ河鹿の声がする

竹原市 時 広 一路

隅で鳴る鈴は孤独な音をたて
キャンパスは白いままなり我が余生
人目には漫画のように見えるかも
青畳大とゆう字に受けてくれ

東大阪市 桑原 喜風

永病みを労わる祖父の深い皺

孫の為めまだ慾捨てぬ老いの坂
新聞紙読み捨てて世を老い惜み
柳人であつた喜び句を遣し

大阪市 神田秀峰

旅情などカケラもみえぬまませルフ
用事する段取り他からつぶされる
制服の不便は期限で風邪を引き
ぜいたくな悩みヤセル菓飲む

岡山市 時末一灯

云い勝つて心に雨の降りやまず
雨あがり合格表に吾が子いる
老猫の視線動かず黄昏れる
途中下車初老にロマンの欲しい日だ

生駒市 草深酔升

外来で見知らぬ人にいたわられ
五十歩で止まり三十歩でまた休み
幼稚園返事に困ることを聞く
胡座して読めば敷き熨し頼まれる

大田市 藤田軒太楼

自力更生車椅子にある誇り
冷房にしたかと駐在話し込み
噂さより実直らしいお人柄
見通しの甘さ逆目と出たあせり

和歌山市 内芝としよ

あじさいは虹の親類かも知れず
平凡な夫でよかつた汚職記事
竜宮へ行き度いくらげのパラシュート

大阪市 黒田真砂

振り返る過去はピンクの俣煙る
花菖蒲女にもどる夜の顔
きっかけをつかめずに居る部屋の隅
いさかいの後のレモンが胸をさす

枚方市 宮川珠笑

検札へポケットの数多過ぎる
不機嫌な課長ローンの支払日
前祝い地球が回ることに信じ
セールのメモに血液型もあり

東広島市 高橋鬼焼

サンガラス罪な女にされそうで
七月のページへ雨の音がなく
レモン噛むちょぴり嘘が聞きたくて
消しごむのまるさよ罪をいくつ消す

和歌山市 若宮武雄

さすらいの今はをせめて波しぶき
砂丘にいて掴める嵩はこれっぽち
靴の紐切れて気にする身の周り
妻を子を庇う白旗ためらえず

大阪市 西川誓二

七変化あじさい媚びる彩をもち

穢土といわれてもこの世はまだ未練
老い夫婦邪魔をせぬよう世を渡る
縄のれん素通りすれば喉が鳴る

宇部市 平田実男

微分積分では浴衣さえ縫えず
スキャンダルないからスターにはなれず
かけたくもかけたくもなし老眼鏡
スプーンで食べて西瓜の味がせず

諫早市 原田明春

社長私書話題をまいて嫁きおくれ
好不況かかわりもなく妻は肥え
泣くやつがあるかと許す気の涙
扶養手当女房の価値の安いこと

守口市 羽原静歩

暴走もせず牛歩もせずひとり
一杯の麦茶風のためを聞いている
旅信しきりスイスの風を持って来る
握手したぬくみを思うチューリッヒ

松江市 恒松町紅

悔のない陽が退職の朝昇る
退職へ趣味があるので羨まれ
退職へさてこれからの設計図
新築の夢ふくらませ地鎮祭

京都市 都倉求芽

おめでたい夜お勝手に鉢が鳴る

真っ赤っかの爪が重そうに市場籠
噴水の風へベンチの話題途切れぬ
第三者ばかりが深刻に話し合い

泉津市 村上春巳

アゴ紐に汗をためてる男性美
丹誠のヘチマのんびりした顔で
三輪畝傍耳成田植機メカニズム
念押しして嘘のききめを確かめる

米子市 増田竹馬

総裁戦の予想指で輪を作る
指切りで孫に長寿を励まされ
式はハワイ日本で離婚の記者会見
ブラウン管ブラジルに耐え抜いた顔

島根県 錦織文子

平凡な日々ドラマのようにはいかず
悠々自適とは他人から見た言葉
感涙をゼスチャーだったとは気がつかず
計の風へ急いで年をおいて見る

島根県 榎原秀子

無理矢理に持たした傘が役に立ち
雨の花あじさい長崎の花ときく
置き忘れた財布の鈴は用足さず
心の眼開けず脚をふみ違え

柏原市 大峠可動

青春の喜劇まっ赤な服を選ぶ

武器錆で中年脱走兵となる

自爆かも知れぬ答を持つている

決断を迫られて振り子が早くなる

大阪市 藤田 頂留子

鉦太鼓まだ耳に有る祭明け

家計簿が手綱をしめる月なかば

猫の声精一杯にラブ賛歌

カラオケ喫茶今夜も銭にならぬ声

東大阪市 竹中 綾女

口づけの嫌いな亡夫で物足らず

妬かぬふりして妬いている他人

嫁が来て座敷を夏にしてくれる

一泊の旅ベルトコンベヤーに乗ったよう

美禰市 安平寺 弘道

離職票働き蜂の目が淋し

傷心を捨てると明日が見えてくる

合鍵をすぐ作ります恐ろしさ

同じ趣味妻の進歩が気に入らず

寝屋川市 江口 度

雨だれへ文字摺草が咲きのぼる

人間おろかなりとけっして云わぬ神

千日手息子はげます言葉よる

追うのをやめると恋はこちらむく

今治市 越智 一水

聞いてくれ田んぼの声と土の声

動かない水動かして澄んで来る

目を閉じて弱点つかれまいとする

血圧を二〇〇にさせた家を建て

七尾市 松高 秀峰

円高で世界の国の目を集め

皿洗い今は女将ですましてい

行水の音の聞える帰り道

伸びる子の新聞少年かけてゆく

鳥取県 清水 一保

子のライバルまで親が決め

過去現在未来を瀬音に聞く流れ

サボテンの花を愛してトゲ許す

無い袖は振れぬ振れぬと振る政治

寝屋川市 柴田 恵美子

現実のきびしさロマン派任じつつ

子供連れ同士の奥様へ遠く乗る

大胆な決断もする女波

大それた数字をマニキュアテレックス

宝塚市 小畠 無聖

老醜の孤独かくして仮面つけ

童謡が母のうつろを引きもどし

星に背を向けても墮ちる罌の艶

花にさえ二言があった花言葉

鳥取市 佐々木 静泉

うつぶんを晴らそう小石見当らず

冗談にしては きりっと痛過ぎる
働いた汗を飲みほす大ジョッキ
マイホーム主義へ職場に詩がない

鳥取県 林 露 杖

苔青く心のきずを洗う雨
傷心の視野に青空広すぎる
哀歌ともコップの底に鳴る氷
大様な構え不安がふと覗く

米子市 佐 伯 越 子

命綱夫につないで海女もぐり
代々が家訓をつなぐ旧家の灯
僧兵の夢跡しのお伯耆富士
片言をしゃべる子供へ言葉添え

仙台市 川 村 映 輝

震度5ローン残して家が消え
握りめし多勢で食べるからおいしい
叱ってから悔いだけ残り早寝する
新幹線山を串ざしにして走り

豊中市 安 藤 寿美子

月下美人丑満時の闇を咲く
夏瘦せを知らぬ女で馬鹿にされ
どうしても後めたさの昼寝なり
大へんな道をえらんだ蚯蚓の運

鳥取市 大 塚 豊 生

一泊の旅へ浮気が伏せてある

無人駅生きねばならぬ老夫妻
病人を励ます嘘を演じきり
絶壁を切り裂く滝の白き眼に

大阪市 横 地 雅 風

嫁す日まで生きたい孫へ夢をかけ
また一つ朽ち行くように歯が抜かれ
いい子だね素直ですねが出世せず
子が巢立ち新に老朽船の舵

大阪市 神夏磯 道 子

死者よ奢ることなかれトランペット
一つしかない答え母の意見聞く
裏口へ廻れば話の分る人
街角のポストへ返信の祈りこめ

和歌山市 吉 野 富 子

年下へびったり添うている平和
平然と明日無い女の二枚舌
衣食足る暮しへ足らぬ貌でいる
四面楚歌天へ唾吐いている女

桜井市 河 合 茂 雄

腹の底見せず外掘埋めにくる
エリートofのレール支える役である
やどかりになつて住宅ロン背負う
疲れたらふり向けばよい坂の道

大阪市 本 間 満津子

もう一つの道なら今はどの辺り

スタートの遅れ完走を決意する

孫誕生地球の裏からベルが鳴る (ラジールに男子の孫出生)

遠すぎて泳いで行けない鯉のぼり

姫路市 梅谿庵 不 醉

血圧の二百を酒に罪を着せ

無常の灯明日とも知らず慾に呆け

吝じやないあなたを思ふ身をあんじ

岡山県 出 原 敬 一

余裕ある生活はごみ箱まできれい

わが庭も便りも初夏の候になり

読もうとも仕舞うともしない教科書

倉敷市 藤 井 春 日

無の一字悟っておおらかな老の日々

開運だるま片目のまんま五年経ち

ロボットに過ぎぬ文金高島田

岸和田市 福 浦 勝 晴

ガチャマンの夢は哀しくスクラップ

髭を剃る理髪士何を企むや

遠花火あいつの事は忘れよう

兵庫県 大 江 秋 月

境界線に溝川隣と仲の良し

年金のベア期待する年令となり

夕立を待つ間パチンコよく入り

京都府 間 嶋 青 丹 子

盛り場の朝はなんだか白痴めき

裾まつる母の背中にある丸み

唐津市 新 岡 回 天 子

老友が寄ってアホーを語り合い

爺さんの大きな傷に戦あり

絵心があつて綺麗な見舞来る

玉野市 小 谷 仙 山

素人と言うハンデーで誉められる

遠花火悔なき今日の汗流す

芥子の花 罪は人間どもに有る

岡山県 直 原 七 面 山

嫁にはつらい姑の早起き

駄目男へ駄目女の恨み節

恋終る気配逢わないままでおく

貝塚市 行 天 千 代

くすぶつた恋の重荷の捨てどころ

鍵一つ無くした母の慌てよう

消火器の年月切れても捨ておしめ

島根県 西 村 早 苗

カットした襟足妻に夏祭り

よもやまの話の裏に見栄チラリ

離婚沙汰子を抱き女揺るがない

竹原市 鈴 木 かつ 子

茶柱へ今日も夫婦という積み木

詫びる子へ許す涙のかくされず

子を論す昔の自分にはふれず

出雲市 高橋 可保留

京都市 山本 規不風

中年のずるさ言葉の使い分け

裏口へ内密話を持って来る

例えばの話と借りるメロドラマ

大阪市 北 勝 美

東大阪市 崎 山 美 子

間違いであつてくれよと風の音

わざとらし大きな笑いにある皮肉

正直に阿呆がついてもそれでよし

姫路市 大原 葉 香

正 本 水 客

老人の強情医者には素直なり

孫の嫉自信をもって嫁叱り

浴衣からはみ出す素足白すぎる

岸和田市 清 野 こう

滝に沿うて新緑の炎おちてくる(塩原温泉)
おりて曲つて降りて河岸の湯にひたる
とうとうと野趣が流れてお湯になる(那須高原川の湯)
湯は満ちきて大岩盤が透き通る(甲子温泉)
原生林みどりの雨が薄れゆく

伊 藤 茶 仏

ふるさとの友恋う夜の流れ星

往復へまだ続いてる立ち話

倉敷市 藤 原 桜 山

イライラのペースに円の独歩高
頰冠りして円高の差益積む
職安に受け皿がない落ちこぼれ
冷房を嫌う扇子を持ち歩く
五十肩さすり出歩くお人好し

三面記事へ安い同情

居眠りへだんだん濃くなるアイシャドウ

炎えきれぬ女に辛い角砂糖

岸和田市 島 崎 富志子

浜 田 久米雄

ついて来そうだから過去を振り向す

化粧して弱い心を補足する

上品な言葉のあとが出てこない

俳優の涙は玉のように落ち
虹が出た空の低さをうれしがり
参考書暗記していたのに忘れ
さりげなく見せた素足にある色気

期待した選挙が声もなく破れ

本 田 恵二朗

川 村 好 郎

深呼吸思ひ出させた山の朝

朝露に濡れてうれしい里の道

老境の話題へ古里浮いてくる

思ひ出を語り合うとき若返えり

盆立ての香りゆたかにもてなされ

菊 沢 小松園

橘 高 薫 風

哲学のみちに蒲公英 蓮華草

父の日に父は朝から家に居ず

父のことに触れない子供になつて

力ない声で2号を呼びにやり

スカートの長さ位いを気にするな

若 本 多久志

西 尾 栞

あばら骨キリストに似て老い深し

しかたなく三猿主義に生きんとす

庭いじりひねもす無我の境に在り

夾やかな疲れに老いの命知る

燃え残る情熱はただ美味求真

残暑お見舞い申しあげます

川 柳 塔 社

弱点を突いて男の負けになる

忙しい忙しいと週末避けて逢い

捨て台詞女の胸にある打算

言いかえず言葉ビールと共に飲み

振幅はせばまりゆけど止まるまい

寺尾俊平さん新居落成(一句)

蔓ばらと善魔の護る城ならん

五十二はまだ青年よ路郎の忌

柳暗やお染久松蔵の窓

紫陽花の炎群愛染不動かな

鰐口のとよらない音奥の院

影だけがジャンギャバンに似てみじめ

拗ねているうなじはほのと匂うなり

年金をもらうに拗ねたことをいう

脱稿に涉どるペンの影やよし

川柳 太平記 (4)

俳諧誕生の系譜

東野 大八

連歌は五七五の長句と、七七の短句を二人がかりで一首とする遊戯で、奈良期にはじまり平安期で多く行われた。これを短連歌という。これが院政堂上で流行して三十六句（歌仙）五十句（五十韻）百句、千句などにつづけるものが現れたが、これを長連歌という。

連歌は盛んになるにつれ、二流に大別された。一つは滑稽頓智を旨とする狂連歌で、一名栗のものと衆で「無心」という。いま一つは風流雅趣の古来の和歌のところにたち、一名柿のものと衆で「有心」といった。

連歌はいわば基本としては、前句付合の修練を伴うわけだが、比重は五七五の前句の上の句にかかる。一名これを脇句ともいう。俳句の前身は「発句」だが、これも五七五で、

理窟からいえば、前句（脇句）も発句も同じ意味になるわけだ。

連歌の母胎は和歌なのだが、当初の純正連歌が、栗と柿、無心と有心の二流に変質するもの、もとはといえば、和歌そのものが風流典雅の産物だから、その連歌衆は人間本性の流露のままに硬軟両様の趣向が生じる結果になつた。

純正連歌は、天皇初め殿上人が盛んに力瘤を入れ、五十韻、百韻が生れて、殿上人二条良基が、連歌集最初の新撰菟玖波集（一四九五）を出した。もちろん、これには狂連歌は圏外におかれる形となつた。ところがこのような純正連歌の宮廷だけに、連歌の作法や式目がかましくてその道の宗匠が出現する

と、金品のもの賭けがはじまつた。天皇や殿上人がかくて血道をあげ、或時には金十兩を賭けて連歌を行う墮落ぶりを示した。すなわち純正連歌は、帰るところ、堂上貴族階級の寡占化された遊戯賭博趣味の狭い範囲に縮小されてしまった。

こうなると当然、大衆の連歌として、式目無視、誰でも来いの狂連歌の台頭を呼んだ。そのリーダーが山崎宗鑑（一四六七—一五五三）である。そしていま一人は荒木田守武である。連歌の俳諧事初めは、この兩人の出現に創るという訳だ。論池叢書にも「宗鑑・守武は志を同じうして、連歌の滑稽風流をわが本尊として、その道をひらきたれば、俳諧の事は何時とはなく、この兩人に帰するようになりて……」とある。

宗鑑の「犬筑波集」（一五一四）は、一口にいえば、権門の勅撰連歌集たる宮廷連歌師編の菟玖波集へのいわば面あての刊行物である。卑俗卑猥も沙汰の限りのその憶面のなさは、貴族階級の純連歌への嘲笑を意味した。この宗鑑イズムとは、狂を貫道して真をみる。その本性は庶民大衆にひそむ滑稽である。この滑稽諧謔さえつかめば、一切の權威や体制すら笑殺できると彼はみたわけであ

る。(この宗鑑に就いては、随処で書いたのを省略する)

守武は宗鑑の「竹馬狂吟集」に共鳴して、「俳諧百韻」を出している。彼は伊勢内宮の神官で、十五歳で禰宜に補せられ、四十四歳で二禰宜に進み、六十九歳で長官となった。神宮の神官は挙って連歌マニアが多く、彼の一家は祖父の代から連歌一辺倒、宗祇をはじめ名ある六人の連歌師も出入りしている。父や兄は純連歌党だが、気のあった往時の伊勢連歌の大御所で連歌師の兼哉までが

「連歌のあとの肩ほぐしは俳諧が一番」

などという。彼は俳諧百韻のあと千句独吟を思いついた。連歌はかすみ俳諧はブーム。しかし父兄や一門の宮廷連歌流に、自分は俳諧とは申訳なしと、迷いぬきやがて快断のくじを二本作って神前に供えて、その出方に賭けた。ところが当たったのはなんと俳諧の方、彼は座上、二尺もはね上って喜んだという。

— 飛梅やかろがろしくも神の春

この即吟こそが「守武千句」(別名飛梅千句)の巻頭句である。時に天文九年(一五四〇)

「さて、はいかいとてみだりにし、わらはせんとばかりはいかん。花実をそうて風流にして、しかも一句正しく、さておかしくあらんように世々好士の教え也」

守武千句の跋文に彼はこう書いている。

かくて世は連歌の俳諧一辺倒の観を呈し、式目も詠法も気ままに崩れ乱れようとする頃松永貞徳の登場となり「新增犬筑波集」(名淀川)(一六四三)が出ることになる。これと併刊した「油漕」には、宗鑑の犬筑波集の宗鑑の前句・付句を再録している。

前 切りたくもあり切りたくもなし

付 盗人を捕えてみれば我子なり

この付句こそ、後年の古川柳の白眉の一句となるわけで、柳村柄井川柳の出生に先だつこと実に二百年の昔にさかのぼる。川柳史上注目すべき一句である。

宗鑑・守武によって連歌から独立すべき地位を与えられた俳諧は、都市から地方へ、上層から大衆へと普及化したのが、その隆昌に大きく影響したのが貞門俳諧である。貞徳(一五七一〜一六五二)こそがその始祖である。

どこの文学史をみても、その作品は無価値でも、文学史的意義の面からすれば一流なみに名を挙げねばならぬ作家がいるものだ。その一人がこの貞徳であり、宗鑑であり、守武かも知れぬ。わが国の俳諧史上、欠かせぬ人物には、この三人がいるわけだ。

— 皆人の昼寝の種や夏の月(犬子集)
貞徳の持句で色紙、短冊によくこれを書いた
そうである。芭蕉いわく。

「上に宗因なくんば我々の俳諧今以って貞徳のよだれをねぶるべし」(去来抄)

要するに貞門俳諧とは「やさしさを体とおかしきを用とする」(俳諧初学抄)の言語遊戯に過ぎなかったのである。

ここに出てくる西山宗因(一五二四〜一六八二)は、帰するところ芭蕉を開眼させ、後世の蕉門永代の布石となった人物である。

「そもそも俳諧の道、虚を先として実を後とす。和歌の寓言、連歌の狂言也。連歌を本として連歌を忘るべし」(木原宗円//阿闍陀丸二番船)

「上手は上手下手は下手、上手、下手いづれを是と弁えず、すいたこととしてあそぶにはしかり、夢幻の戲言なり」とも同じところで述べている。これが宗因の俳諧観そのものであったわけである。この宗因が貞門俳諧をやがては駆逐する談林俳諧の総帥となるのである。談林の語源は沙門の学校の壇林から生れ、これを俳諧談林と称したのは江戸の田代松意で、「談林十百韻」を江戸で興行したのが公認の談林となった。この時、宗因は大坂ですでに談林のものを手がけており、名称だけが江戸で生れた形になる。松意の師匠は宗因である。蕉門の許六いわく「世をあげて宗因風と称し面白がる」俳諧談林の天下の到来である。

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

黒川紫香

淋しい日もの言う犬の瞳に出逢う

岩田美代

心と心の触れ合いは人間だけでない、知つてか知らずでか言葉にならぬ犬の瞳に何か救われたような気がする。

握手してはつきり敵と覚えたり

月原宵明

握られれば握り返えずこれが男というものだ。闘志をかきたてる血が昇って来るようだ。白杖のそこまで雀鳴きにくる。

堀江正朗

心優しい正朗さんの姿が浮んで来る。敵意のない白杖に雀も安堵して寄ってくるのであらう。

進物にするには惜しい柄を選び

堀江芳子

進物にするのだと判っていても矢張り自分の好みになってしまふ、女の性を見せた一句である。

瀬戸物の狸に西日暑すぎる

香川酔々

つい先日嵯峨野でこのような風景を見た。緑が濃い嵯峨野の茶店の庭にチョコナンと立っている狸は道化でいて安らぎを覚えるが、夏の西日に耐え触れれば火傷をしそうな熱さを感じる。打水も直ぐ乾いて僅かに凹で汗をかいたように残っているだけだ。

改札機俺の定期をひたたくり

村上春日

自動化というものは愛想も素っ気もない、人間も機械的に動くより仕方ない時代になって来た。間違えば人前も憚らずにキツコンカンと鳴って曝し物になる。降りる時入れた乗車券が出ないので待つて居ると一度開いた扉がまた閉つてしまいうろろしているお年寄りが居た。吾妻ひな子の漫談を地で見たとような風景であつた。

また一つ齡の重みで梅漬ける

高橋夕花

夕花さん。やがては良いお婆あちゃんになられるだろうと思つ、一つ一つの年輪がちよつとした事でも重味を感じさせるものだ。祖母から母へ母から娘へ時代の移りはあつても暖か味は変らないものだ。

赤電話あじさい見ながら言葉撰る

中村ゆきを

受話器をとり金を入れたもののどう切り出そうかと呼び出し音を聞き乍ら考えていると店の鉢植であらうあじさいが見事な花をつけていた。一寸したスケッチだが美しい。

達者ですなあと不思議そうに言う

野口右近

私も言われた覚えがある、達者でいる事が可笑しいような言い方だが他意はなさそうだ。羨望ともとれるし健康法でも聞きたいのであらう。

さして飲むお前寝首もかきかねぬ

山根白星

ぶつそな言葉だがお前と言うからには妻君かそれに近い相手だろう、警戒をしているよりむしろこの言葉の裏に、頼りにしてゐるぞ」と言つた安らぎを感じさせる。

山小屋で聞く雷のものすごさ

河井庸佑

昔、六甲山で深夜登山をしていて雷雨に見舞われた事がある。逃げこんだ山小屋で聞いた落雷の音は本当に物凄かった、それが山小屋より低い所で光り一瞬小屋の中の裸電球が形容の出来ない音で割れて飛び散つた。眼の下で落ちた雷がどんなに怖いものか知つた一夜だった。

害虫にされて害虫ふに落ちず

小谷仙山

人間の依古である、生きる為の仕草であり努力でもある。人間の世界にもそんな例えがあるだろうと虫は言いたい。

片腕のつもりで走るお人好し

伊藤茶仏

古い題材だがお人好しがほほ笑ましく出ている。みんながこの姿だったら争いは起きないだらう。ユーモアが惨み出た句である。



岡田甫

誹風柳多留廿五篇研究

—(二十二丁)—

西原	亮・鈴木
入江	勇・清
紀内	恒久・青木
博	美・八木敬一
迷朗	朗・岡田甫
黄・室山三柳	

361 焼香の初筆上ミ下あたらしい

西原「初筆」は初めて筆をおろすこと。ここではトップという洒落。焼香をはじめてする人は、袴があたらしい。袴は礼装である。鈴木「贊」。「しやう香を先キへしたので後家と知レ」(二・16)。

入江「礎稿に贊。施主。

焼香は煙をつまむやうに見え 二七・20

焼香に会釈のないが血筋なり 三一・37

八木「同意見だが、この句はもう少しつめられる。お焼香をする順番は紙に筆でちゃんと書いて用意するのである。「(一)……殿、(二)……殿、(三)……殿」と、司会者みたいな人が読み上げる。それで「初筆」が生きてくる。

最初に焼香する人は喪主である。

新潟県、昭和初期の話だが、葬式のととき、新しい袴を作る風習が残っていた。もちろん喪主またはそれに準ずる人だけであるが。それから焼香の順序というものは、現在も

そうであるが、非常にうるさいものである。

「初筆」は決まった人になる。その辺も承知して本句を解する必要がある。

青木「同。袴が新しい、焼香の筆頭者であるから、喪主であり年若き嗣子ということであろう。

岡田「同。

362 水性の字をくり出して孔子付け

西原「『史記』孔子世家第十七に、「孔子の子の鯉は、字を伯魚といい、年五十で孔子に先だつて死んだ」とある。

孔子が自分の子に名をつけるに、「鯉」とか「伯魚」とか、水に縁のある字を、次々と出して来たことよ。

入江「贊。謡曲「天鼓」にも、「伝へ聞く孔子は鯉魚に別れて思の火を胸に焚き……」と見える。

聖人の身にもかなわぬあかり鯉

一九・20

(「あかり鯉」は死んだ鯉)

岡田「同。礎稿、孔子の伝記などよくお調べで敬服。

363 顔の墨嫁おちたかへく

西原「顔のよこれをひどく気にやむのは嫁。羽子をやつて墨をつけられたのでもあろう。折鶴と羽子の子に嫁いきを出し

羽子の子で嫁左きき見付られ 二八・21

鈴木「贊。ほほえましい情景です。 二九・25

入江「同。笑はれる顔落ちたかへく、 傍一・28

青木「同。古川柳では、嫁は羽子つき、歌かるたの名手となっているが、上手の手から水がもれる場合だつてある。

岡田「贊。

364 善をぜんとし振袖で三分也

西原―「善を善とする」という漢語仕立がみ
そか。

振袖新造を詠んだ句。振袖の年若な身で三分女郎とはと驚くが、善いものは十目のみるところ十指のさすところ、やっぱり善いからやむなしと。

室山―振袖新造の「三分」は解せない。屋三名の名代もおかしい……。踊り子か。二分が普通だが、あまりすばらしい美形なので……。どうもおちつかず。

八木―詳しい説明は、はぶくが、本句は江戸町一丁目扇屋の四代花扇を詠んだものである。

「善を善とし」は、

あふぎやへ行くので唐詩せん習イ

二〇・31

扇屋の要東江流を書キ

二五・5

とあるように、花扇が学問のあったことを暗示している。漢詩などにも造詣が深かったことをふまえている。

青木―四代花扇の時事吟説に賛。

岡田―同。

365 色悪の跡のやつしハ鍛冶屋也

西原―仙台候かとおもったが、刀鍛冶とないのでむりだ。「川柳江戸歌舞伎」に、「新薄雪」だろうといい、「辞彙」も「新薄雪の団九郎か」という。礎稿もこれに従う。

室山―礎稿賛。浄瑠璃「新薄雪物語」は、時代物で三段。寛保元年（一七四一）竹本座初演。仮名草子の「薄雪物語」から脚色したも

の。「色悪」は柔かみのある敵役で、「東海道四谷怪談」の伊右衛門、「かさね」の与右衛門等。団九郎は正宗の子で悪役の秋月大膳から命ぜられて、清水寺へ奉納の秋月二天下調伏のやりすり目を入れ、そのためにいろいろ騒動が起きるが、団九郎が父正宗の秘法を盗もうとして片腕を切落され、悔悟して大膳の悪事を自白、といった筋。左衛門と薄雪姫の恋物語が中心なので、この題名がある。

岡田―同。室山氏よくお調べ。

366 袴着を夷待てるけちな奴ッ

西原―「袴着」は、男子五才の祝いで、十一月十五日袴きて氏神に詣でる。「夷」は、えびす様か、それとも夷講か、えびす呉服店かと思つたが、「けち」とむすびつかない。

袴着に、袴や袴その他を求めると金がかかる。そこで誰か祝いに呉れないかと、そのような夷を待っているけちな奴といふのである。

鈴木―「夷」は「夷講」かと思う。恵比寿講は正月と共に十月廿日は特に盛大で、商家は商運を祈つて祝つたものである。従つてこの日に来たお客には、タダみたいな値段で売つた。「袴着」のようなお祝い用の着物は、当然普通の日では高価であるので、十一月十五日に着る「袴着」を十月廿日の「夷講」の日にタタいて購入しようとする。こういうけちな人物を諷した句ではなからうか。

室山―鈴木説としたが、「川柳年中行事」「川柳歳事記」に、安売りをした記事はな

い。むしろ、

あてことも無イ直で売る蛭子講

一三四・16

恵比須講百万両がどぶへ落チ

四三・32

と、高値をつけて景気よくやったらしい。これはやはり「えびで鯛を釣る」式に、福の神を待っている「けちな奴」ではなからうか。

八木―大正期の話ですが、母によると呉服屋の恵比寿講では少くも五分位は安売をしたそうです。恵比寿講に普断よりも高い値で売ることは考えられない、とのこと。父の実家が呉服屋ですから、呉服屋の事情を内部から見た話です。

岡田―夷講に少々安売りした事実を初めて知りました。これで句解がハッキリする。

367 かたうどなしにおらんかいまでおかし

西原―「かたうど」は、味方する人、ひいきをする人、仲間の意。

「おらんか」(兀良哈)は朝鮮の地名。豊臣秀吉が朝鮮征伐の際、韓国の二王子を捕えた所である。

句意は、二王子を捕えようとした時、助っ人がだれもおらんのに「だれかおらんかい」と叫んだ事であろう。その地名も兀良哈だけに、いっそう面白いというのである。

室山―同。「かたうどなし」と、「おらんか」は縁語的に用いたのである。

岡田―オランダカイという地名が面白いので作つた句。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 53年 5月号
至 53年 8月号

路郎賞候補作品

(到着順)

若本 多久志

友達はいい人ばかりさくら咲く
沈丁の香にまみれ来し猫の恋
昆布煮る匂いの中に亡母と居る
妥協した笑顔の隅に翳がある
生きのびたいのちしみ春の風
つまずいて有情無情の人に会う
父らしくない父わびて靴を履く
夜桜へくどいてみたいおぼろ月
札東に悲喜交際の指の跡
平凡なしあせ朝の葱刻む
ほだされて心の垣根はずれかけ
花あやめ尼僧の笑は清々し

橋高 薫風

満開の花に誘われ修羅出土
新雪は新聞配る僕が踏み
にぎりめし母の祈りのかたちして
夫より威厳を示す古時計
春や憂し膝の小猫もみごもりぬ

香川 酔々
石垣 花子
小出 智子
高橋 夕子
柳原 静香

カレライスの一片の肉何時食べる

西尾 栞

花葉漬屋は私の天下です

安藤寿美子

孫の名をいれて童話を孫へする

森田カズエ

入歯はずして渡したとこが手術台

戸田古方

定年の眼鏡の玉の疵だどけ

月原 宵明

どぶ池の客電卓へうなずかず

村上 春巳

ハンサムの車椅子から目をそらす

垂井千寿子

ルームランナー二十日ネズミも思われて

時末 一灯

家背負う少女の胸にマリア像

中村ゆきを

一番を守り通して父がない

小幡 里風

一番を守り通して父がない

嘉数千代香

揺れ動く世相へ遠く榎を蒔く

嘉数千代香

妻の旅チャンスは夫の方かも知れぬ

河野 君子

果立せて広角レンズ手離さぬ

八木 千代

一つだけ好いとこ認め合おう歩巾

柴田恵美子

外堀を埋めにやってきた笑顔

高杉 鬼遊

家族の中で夫他人になりやすき

河野 君子

白い杖道ゆざられたを気がつかず

本間満津子

よくよくの事で老妻下手な嘘

飯塚 虎秋

にぎりめし母の祈りのかたちして

小出智子

鉄斎に男の好きな赤がある

榎谷 寿馬

凍つても水より逃げ場のない魚

小砂 白汀

田を売って世間の恐さだけ残り

遠山 可住

牡丹散る満ちる想いに耐えかねて

八木千代

八百屋より優越感は果物屋

谷垣 史好

つばめ来るわたしの無事を確めに

堀江 芳子

川村好郎

一番を守り通して父がない

小幡 里風

揺れ動く世相へ遠く榎を蒔く

嘉数千代香

妻の旅チャンスは夫の方かも知れぬ

河野 君子

両の手でグラス温める日の叛意

中村ゆきを

さよならが辛い夕陽よなせ炎える

松原寿子

飲めるだけ飲めとは妻のやけくそか

河村 日満

働けばわかる夕陽の美しさ

那須 鎮彦

西尾 栞

安藤寿美子

森田カズエ

戸田古方

月原 宵明

村上 春巳

垂井千寿子

時末 一灯

中村ゆきを

小幡 里風

嘉数千代香

河野 君子

中村ゆきを

松原寿子

河村 日満

那須 鎮彦

西尾 栞

安藤寿美子

森田カズエ

戸田古方

正本水客

果立せて広角レンズ手離さぬ

八木 千代

一つだけ好いとこ認め合おう歩巾

柴田恵美子

外堀を埋めにやってきた笑顔

高杉 鬼遊

家族の中で夫他人になりやすき

河野 君子

白い杖道ゆざられたを気がつかず

本間満津子

よくよくの事で老妻下手な嘘

飯塚 虎秋

にぎりめし母の祈りのかたちして

小出智子

鉄斎に男の好きな赤がある

榎谷 寿馬

凍つても水より逃げ場のない魚

小砂 白汀

田を売って世間の恐さだけ残り

遠山 可住

牡丹散る満ちる想いに耐えかねて

八木千代

八百屋より優越感は果物屋

谷垣 史好

つばめ来るわたしの無事を確めに

堀江 芳子

いまのうちに着ときなはれと一張羅

草深 酔升

偉いやつ仰山居るなあ春叙歎

岩井本蔭椿

西尾 栞

安藤寿美子

森田カズエ

戸田古方

流し目で見届けておく岩田帯
人を指す不遜な指ももちあわせ
繭の精絹の衣で眠ります
恐ろしやボタン一つのかけちがい
工藤 甲吉
神夏襦道子

嗚呼夫婦異状乾燥注意報
さあ働らこう白蟻こわいことを言う
林 露杖

夏期手当くずすも笑止胃腸薬
石焼蕎麦後のけだるさ極まれり
白杖のそこまで雀鳴きにくる
西森 花村
関 美子
時末 一灯
堀江 正朗
ふるさとを町へつないで赤字バス
中川晃男
防衛に廻れば弱いとこばかり
月原 宵明
食いしぼる奥歯も今は義歯となり
高橋千万子

偉いやつ仰山居るなあ春叙勲
寄り添うていてもこけしは手を出せず
岩井本蔭樺
内芝としよ

踏まれたら雑草ひらき直るべし
家族の中で夫他人になりやすき
高杉 鬼遊
河野 君子
ほほは笑むと神に近づく知恵おくれ
中村ゆきを
室谷 徹舟
順番と言うさみしさにやがて逢う
小出智子
雑踏の隣りはさすが他人さま
水粉 千翁
ハッタイ粉おれも分別臭くなり
谷垣 史好
そこらまで歩こう逢えただけでよし
大矢 十郎

菊 沢 小松園

妻にやる風の涼しき叛かぬか
千本の針は女が持っている
板尾 岳人
宮西 弥生

川柳塔賞候補作品 大坂形水

充ちたりて大きな夕陽がおどてゆく
小林鯛牙子
幸せにおなりトラックの荷がゆれる
中塚 喜甲
反抗期二階の城を日々かため
横なぐる雨に笑っている羅漢
猫の目が小鳥の動く方へ向く
考える蛙ポカンと浮いてみる
矢野 佳雲
喪の席で夕餉の支度など思い
割箸で食う三食を忙しがり
花の散る軽さ疑い深くなる
小谷 葉子
人は皆手品のように家建てる
梅本登美也

黒川紫香

どちらからともなく唄う枯すすき
同じ雲おなじ流れを見て夫婦
銀鱗が光れば雑魚も美しい
人の輪に丸くなる人ならぬ人
旧道の賑わい桜咲くあいだ
憎しみが解けて枯野を引返す
三つ指を突くから父が涙ぐむ
寄り道のほうで記憶に残る旅
吉岡きみえ
中村葉士人
矢野 佳雲
大林曲ん手
麻野 幽玄
小谷 葉子
井上柳五郎

脅迫状書くえんぴつを光らせる 川上 富子
鳩が二羽帰りをこねた屋根にいる
竹内花代子
考える蛙ポカンと浮いてみる 矢野 佳雲
喝采のない花道を母歩く 福田 保子
×
戸田古方
▼おことわりー戸田古方氏の原稿、初校が出た日にもまだ到着せず、したがって形水・紫香両氏だけで中間発表をいたします。

〔広告〕
愛染帖を愛される方々へ
川柳塔第三雜詠「愛染帖」を通じその発展と明日への川柳を考えながらお互に勉強するふれあいの場を持つては如何でしょうか。
御便り下さい。
(世話係・〒664伊丹市西野外川原11-70 櫻谷寿馬)

あなたの
川柳句集を!
お気軽に「相談ください」。
印刷全般 藤原童心社
〒584 吹田市天道町6番15号
でんわ(06)三八八―二三七七番

水煙抄

正本水客選

岸和田市 池田 香珠夫

ぬかるみを委細かまわぬ車椅子
栗のコハク苳のサンゴ載るケーキ

吊橋の揺れを獵犬駆け抜ける

耕耘機見れば燕が折返す

サインしてゐるようにも見える水すまし

滝長く見過ぎて声が嘆れたらし

今治市 矢野 佳雲

合宿の雨は男の匂いする

たたまれた扇子がみせている余裕

懐ろ手胸のうすさを撫でており

9から0までダイヤルの丸い距離

白い蝶ひらひらついと落ちそう

伊勢市 山本 光男

姪のおめでたへおくる

天秤をくっくと担ぐ甲虫

ちちははへ遺して嫁った広い部屋

さしのべる義父母の掌に包まれよ

嫁ぐ日へ優しく母の皿洗う

嫁ぐ娘の指の太さを信じよう

三重県 川上 富子

幸せな死ならば君は死ぬるのか

赤ならば炎えたぎるよな赤がいい

ゴキブリを親のかたきのように討つ

子に話す童話で飛躍許される

イヤリング軽やかな日と重い日と

京都市 松川 芳子

ホームから窓越し孫と手を合わせ

あちこちと手型を付けて孫帰る

核家族雀チユンチユン訪ねて来

バス待ちのゴルフの素振りいただけず

孫の片言アクセントがもう違い

鳥取県 岸本 無人

保険満期二十五年が長すぎた

米減しのためなり長生きしてやろう
九十度ちがえた矢印だつてあり
手作りの野菜で朝を涼しくし
夏負けの胃袋洗う蜆汁

柏原市 小谷 葉子

人間の弱さに茄子の花の彩
浄土まで持っていく嘘は人助け
青春の音して稷粟が開く
嫉妬する今日の私は若返り
吹き降りの如く自分を責めてみる

松原市 北野 久子

夏バテにせめて金魚の軸を掛け
聴えないけれどとにかくハイと言う
自惚れがまだ少しあるネックレス
初孫が出来て鏡に遠くいる
初孫は私の若さ吸うて肥え

高槻市 竹内 花代子

子の結ぶ帯は元気な立結び
ザリ蟹が音をたててる洗面器
傘さして花買いに出来る仏の日
くちなしの匂いへ白い風が吹く
猫でさえ嫌いな物は口にせず

兵庫県 辻 文平

汗臭き父を許して西瓜切る
母がほし唯母がほし盃蘭盆会

夜になれば夜の仮面を用意する
げんげ刈る吾が手の鎌を憎みつつ
墓石となる石に座し孤独なり

広島市 光井 美保子

不安定寂しきみじめさ一人じめ
涙腺のだらしなくなり夜つづく
靴音が今日の私を変えさせる
アロエ酒も梅酒も漬けて女の日
何んとなく砂はロマンを匂わせて

和歌山市 浦野 和子

そよ風に少女の髪は素直なり
古寺巡り今日は善女の顔をして
行きずりのジョークに一日捕われて
石畳洗うて京は暮れなすむ
プロセスの違いか演技のように見え

西宮市 杉浦 婦美子

鳳仙花恋に恋した日もありき
塗り下駄に白い素足が匂うなり
ひと言がある日心につき刺さる
亡き母がひたに想えり鮎の膳
閉された窓にも薄くさす灯

和歌山市 坂口 公子

応接間でしか逢えなかったお父さん
還暦へあと三十年で未だ九十
野の花を故郷の素焼きに挿してみる

意地悪な電話で眠気から逃がれ
こおろぎが闇を囲んで騒いでる

羽咋市 三宅ろ亭

水涸れてダム底石垣をのぞかせる
やや価格おとして中元届けられ
留守番をよくしてくれたねえ扇風機
涼しそうねと能登上布をつまみ
大土間を訪えば返事して蚊蚊

和歌山市 福本英子

縦糸の張りが支えた人生譜
梅雨明け十日草人ともに干乾らびる
鯉攻めに土佐路の遍路茶粥恋う
横峯寺下ってラムネに蘇る
新緑にどっぷり浸った杖洗う

岡山市 水子つるえ

納経帳余白をうめる旅仕度
セキセイの散らす餌があり雀来る
夕立が長く身の上話出る
戦友会北へ南へ会いに行き
糊づけの寝巻につつがなさを知り

寝屋川市 小林鯛牙子

遠足の声積み終えて電車出る
甘藍を放れば受ける妻がいて
奈良山がたそがれてくるピヤガーデン
十葉の根が白かった雨でした

廉売りのチラシ大事に妻の箆

一言へ角度を変ええる地獄耳

お隣りの伝言板の字も覚え

倅せの裏で聞える母の鈴

富田林市 中村優

一線を別なわたしに指さされ

落ちぶれた男が過去に触れたがり

泣き顔が僕そっくりの子に泣かれ

じっとしているのに小石蹴とばされ

岡山市 原田凡太郎

作為なく子の画ゆがんだ線のまま

焼石に水でも誠意ありがたし

客足を見てから夜店の荷をおろし

老妻があんたもボケて来たと言う

島根県 木村はじめ

立ち入った話許せる友といふ

振り向けばまだいてくれるわかれ道

欠点が親しみとなる男です

目的はない東京へあこがれる

今治市 渡辺南奉

風を切り走る若さへゆずる道
故郷の野菜高きを良しと買う
視野無限考える葦に空が有る
裸婦像が迎えてくれた旅の駅

羽曳野市 麻野幽玄

今治市 園部正則

時は私にめまいだけ残しゆく
さよならを書こうとしたら口紅が折れ
知ったかぶりの顔で他人をせめている
ひとときの善人でよし法話聞く

大阪市 岩井公平

石仏に佇てば由来をおもむろに
まぐわいを神とし双体道祖神
紫陽花は浄瑠璃寺の雨を招び
帰るなり玉なす汗の顔を出し

東京都 村上由希子

母のくせ自分の姿に見てしまう
息子の目夫の目よりきびしくて
熱帯夜クーラーうちわ使いわけ
昔の通り手を取り合うて古い友

藤井寺市 中原比呂志

前進の構えで玄関靴ならぶ
ヘッドホンかけて宿題に熱中する
吸いがらをポイと我が家へ捨てはせぬ
合槌をうってる間に策を練る

大和高田市 岸本豊平次

鈍行の旅で日本の広さ知る
幾筋もある道 細い道を行き
裏長屋陽の位置を見て物を干す
気に掛けていくられるかよく叱り

岡山市 串田句昧地

大揺れはせぬが心に鬼を抱き
体臭は消してもなかなか消えぬ嘘
昨日踏んだ轍を目覚めに考える
喝采のない舞台の裏で汗を拭く

大阪市 溝淵美紀子

恋をして真っ赤なバラが好きになり
組板の音に新妻幸を知る
悪い事しているようにピラ配り
改装の店舗で客筋違つて来

大阪市 堀口欣一

自衛隊靴をピカピカ光らせて
花道から新口村は雪になる
宙乗りもあって涼しい夏芝居
堂守の甚平涼しかりけるすがた

豊中市 田中善四郎

古本のように時たま引き出され
迷い子を導く婦警美しい
野仏を慕うかのように桔梗咲く
親切にされて親切の心知る

鳥取市 中森葉士人

向き合って話せば分ることなのに
炎天をきっぱり覚悟決めた脚
やけくそになるのは悟りかも知れぬ
子のシャツの匂いが男臭くなる

松江市 梅本 登美也

お馴染みの顔と朝顔市で会い
病名を本人ちゃんと知っていた
フト迷いさめた女が髪を梳く
十五六魔女のかげらが胸に住む

出雲市 園山 多賀子

夏空に飛行機雲残して孫は去に
さりげない女の台詞は余韻持ち
梅雨明けの宣言いそいそ蒲団干し
青蛙朝顔の葉に軽く座し

愛媛県 宮尾 みのり

文部省唱歌が口に出るも齢
二で割ればまあまあ平均的夫婦
青くさいなんて言えない正義感
その日から軌道修正した出会い

大阪市 欄 蘭

ささやかな年金乱世を生き抜かん
天下泰平昼寝の男隙だらけ
住めば都蚊に刺されてる脱都会
趣味だけはほめて同調等しない

尾鷲市 渡辺 伊津志

反応のない挨拶をして寂し
雨で良し晴れて尚良し船の旅
言いにくいことを言わせる視聴率
それとなく血液型を聞いておく

岡山県 二宗 吟平

おもちゃ屋の方へ方へとぶら下り
有り難うございましたは聞き流し
出るときになって釦が一つない
燕への道だけ開けて家を空け

鳥取市 有田 鹿の子

尺八を吹く子へ亡夫を見る想い
駄目だなあと自分を責めてあきらめる
破れそうな夢を抱いて生きている
怪我的手へ子が雑巾のしぼり役

岡山県 岩道 博友

薄笑い辞令を少し読み違え
老眼鏡黙って母のを借りて見る
愛情を細切れに出す共稼ぎ
故郷の稚魚は遠くへ行くまいぞ

長崎県 村崎 三車

叱かられに坐る子の眼に青暈
コップ酒罎をつつく国訛り
絶景を急がぬ旅の鉛筆画
想い出に心残りの借りがある

旭川市 朝倉 大柏

大吉と神が又もや嘘を謂う
望遠のレンズで子らの軌跡追う
なんとなくお客のように居る新居
よく遊ぶ娘が持っている腕時計

新潟県 高野 不二

男ならと何度も思う娘の育ち
副作用がゆっくり出て来てあわて
大過なくとはいけずうざうしくもない
七光と一緒に借金残ってた

名古屋市 越村 桔 梢

島一つ買う王者の夢をみる
いつまでも女でいたい舞扇
振り向いて影踏んでみる茜雲
振り向かぬ約束もあり遠い道

八戸市 島田 昭 治

どもりだと釈迦も知らない歌上手
ステテコで男の冥利かみしめる
義理義理といたら馬鹿と笑われた
闘志だけ空廻りした今日の僕

呉市 山根 喜代美

発車ベル過去の脱皮をせかされる
過去捨てた度胸女はもう泣かぬ
真すぐに積んだ積木のまたくずれ
意地悪な噂私をとじこめる

高松市 嶋田 扶実雄

狂人の瞳の中の過去覗く
主役をば離れて老母過去を縫う
子沢山熱のある子と母は寝る
母さんのピンチヒッターで夜が長い

大阪市 白石 潔

定年で無駄な背伸びとやっとなり
自尊心すり切れ定年やってくる

(長男結婚)

新世帯際も予算に組んであり
長命の血筋で資産無い不安

尼崎市 中谷 利 美

用件も聞かず妻呼ぶ女客
貧富の差だとは知らない子がふびん
この辺で折れてやらねば子の立場

寝屋川市 稲葉 好 子

梅漬けに姑急に元氣出し
ひとり寝にカンピールの音高く聴く
にわか雨セット気になっている長話

岡山市 砂田 静 佳

天の川に行ったら亡夫に逢えるかも
水道のようにくらしの祖母の智慧
故里はよし方言にある温味

出雲市 吉岡 きみえ

一周忌母をうばったカラス撃つ
独酌へ妻はパートの職に出る
あるときのおんなゆるせぬ怒りもつ

岡山県 柳原 孝 柳

旅立ちの日雑音のように妻の声
家の子にいやがられ他人の子に好かれ

ぶつぶつ言うていて指を切り

大阪市 野田君枝

死に神に円月流も歯が立たず

厄年に静かに散った黒い花

はなし家のネタにもならぬ内輪もめ

倉敷市 中津伊勢吉

釘一本さして論客丸めこみ

梅雨あけが待てず座敷の子の水着

摘み草へ昔を偲ぶ井戸と堀

海南市 牛尾緑楼

命賭けた道に道標など置かぬ

但し書き本音が秘めてある不安

戦艦のプラモは父も持つ意見

倉敷市 野中御前

満腹の蚊白衣の上でたたきかね

これからは辞書を片手に出漁す

実直なだけで課長の椅子遠し

出雲市 板垣夢酔

人生に良しと言う字が見当らぬ

恋果てるすばむ風船に様似たり

け落した石宝石に変身す

大阪市 新川貞祐

史跡ゆく天に齡を借りてまで

禪寺のガラシャの塔に薔薇の花

波濤嶽 土の柱の競い立ち

橋本市 岩倉天彦

問答はこのへんまでと挙手に問う

ひょうたんの出来はどうやと趣味の友

父の日は鼻毛を抜いていた父

大阪市 向井しづ子

おしろいの花が浮き出るつゆの庭

植えかえのさつきいきいきこけの中

桔梗苗支柱をたてて雨の中

町田市 竹内紫鏞

大壁画聖書になじむ妻と付つ

いきいきと異国で妻のコーヒー好き

尖塔の詩をジェット機の音の中

鳥取市 北野天人

治ると信じて妻と法話聞く

空梅雨も梅雨だと持病は知っており

お見舞の友に筆談がもどかしい

岡山市 清水金太郎

無理するなと言うては呉れるが金借さず

順風に帆を張る船に歌があり

手剛いを見て正眼の構えをし

寝屋川市 福富隆子

食へることテレビが生きて居るあかし

移転先釘打つ柱が見当らず

七十のTシャツを着る若さ持ち

熊野市 坪田冬花

子に負けて妻はこちらに矛を向け
大声でどなった頃の父を恋う
うつぶんもいつか消えてた海の青

札幌市 北村 深星

故郷の父まだ頑固さのある安堵
子の進む一直線にある不安
墓詣り父の涙へ遠ざかる

唐津市 桑原 掬治

教え子が交通事故で一人減る
劣等のあの子いつまで年賀状
旧姓でいいかとはじめに確めて

榎原市 西本 保夫

囑託になる日を妻に打明けず
定年へどうしてボクはお人好し
休まず遅れず働いて来た定年

兵庫県 野々口 木綿也

他人から見れば天寿の齢となり
時たまに老人離れの話題もち
極楽か写経の老の小半時

島根県 松本文子

紅をひく耐える心が見えぬよう
仰ぎ見る槍岳雲のえり巻きで
夢一つずつ消していく子の寝顔

唐津市 松垣 岩光

父の日のビール妻にも注いでやり

色ものを真白に変えて夏が来る
海辺に住んで盛夏の客絶えず

唐津市 田口 虹汀

プライドが応答させない黙秘権
本当の涼味見つけた汗の午後
汗知らぬ人が転地をよくすすめ

鳥取県 加藤 茶人

鏡り終えて一服漁場へ陽が登る
三面鏡のひとつが暗い過去映す
もうライバルのひとつりに甥の育児聞く

唐津市 三浦 ひろ坊

たよりない息子家紋をよく知らず
逆境に馴れた男の小さい耳
安売りの値札に沈む武者人形

豊中市 満仲 きく子

二人三脚ときには息の切れる日も
客が来てかけつけ三杯麦茶飲む
風鈴が鳴る母の忌の鎮魂歌

大阪市 中辻 千子

来て嬉し帰って嬉し孫の数
瘦せたいとマラソンこれも三日かな
そっとねるしぐさの中に心出る

呉市 玉木 志恵子

飯の世に浮きつ沈みつして老いる
せめてもの救いと思う子が一人

もっともな話しになって顔が寄り

東予市 小山 悠 泉

母の日も働く母の小さい肩

誘われた方も悪いと叱られる

教え子を叱り自分を又叱り

竹原市 古 谷 節 夫

セールスマン誠意を添えて商談し

大胆なポーズ女の特権かも

妥協して女房の策に乗ってみる

岡山市 池 田 半 仙

一人者手花火で翹う宵があり

俄雨千竿の数だけ慌てさせ

千年の重さに耐えた土台石

唐津市 岩 崎 実

今日もまた一日無事の湯があふれ

朝風呂の客に風鈴ひそと鳴り

どしゃぶりに釣人竿を手ばなさず

青森県 波 た だ お

坂道を振り返り見る海の碧

沈黙を息子の電話に救われる

顕微鏡見る目では世渡りが出来ず

出雲市 高 見 鐘 堂

里で飲む二合の酒に酔いしれる

PTA本音は飲んでから決まり

亡き母の命日嫁いだ娘が帰えり

水番に酒をとどける役があり

姑の好きな干菓子を娘に持たせ

高架線二階の夕餉見て通り

岡山市 花 田 た け 志

梅雨の愚痴一手に受ける台所

囲まれる善意で悪の芽がしばむ

役が押す強風は無理を背負うてる

東広島市 石 井 さ わ 子

大そうじ老いの部屋からヤッコ風

風鈴も語ってくれず昼下り

磨かれた鏡に春の彩がある

島根県 岩 田 三 和

耳たぶに貝がらつけて港の娘

不幸者助ける老人ホーム建つ

夫婦して慣れた手つきの杵の音

島根県 佐 々 木 裕

母老いていまだに若き亡父を追い

片肌を脱ぐ事に馴れファッションに

小細工の利かぬ男の顔の嬖

唐津市 田 中 紫 浪

ひかえ目な言葉の中に理智が見え

草笛の中に父さん生きつつけ

染みついた贅沢再起の服を脱ぐ

吹田市 藤 原 世 史 春

人情も科学の水で薄められ
コンピューターに人間機械にされている
核家族孫が出来たで解消し

堺市 玉井邦晴

リバイバルソング東海林の形を真似
女性軍強し灰皿出しそびれ

松江市 黒目大鳥

はぐれ鳥立ちよる島の灯を守る
鐘の音の余韻うずまく牡丹寺

泉佐野市 大工静子

ちちけても生きる権利は突き通す
紫蘇もんで手の筋いとも鮮やかに

広島市 すがかつこ

妻の耳朶そろりと嘔むや月の欠け
想像の椅子に仮象の妻ねむる

出雲市 園山 栄

考古学戦跡だけは振向かず
注射針刺されるまでの痛さかな

山口県 高崎 雀声

教え子の名前分らぬまま話す
手術まだすまないらしい灯が見える

唐津市 筒井朴竜

穂孕みも刈れと残酷米価審
田の神も怒る瑞穂の青田刈り

長崎県 岩崎和子

半分は気ままな旅をして見たし
病室の白壁埋める千羽鶴

兵庫県 川井白峯

行って来ます帰りましたと言える子に
駅に着き先ず時間見て行動し

橋本市 森脇善彦

ちょっとしたことじゃ起きないぞと昼寝
退院すると悟りきれなくなってます

倉敷市 中島彩子

敗北の唄はだんだん低くなり
つきはぎの愛を育てて灯が眩し

羽島市 伊藤静枝

早刈りへ身を切る思い強いられて
釘一本打てぬ新築の不便いう

大阪市 平井露芳

男の乳仕方ないからひげはやし
天下りすぐ税理士でめしが喰え

北九州市 三上春雄

不況風許り吸ってる深呼吸
元士族などと男は愚痴が好き

岡山市 井上柳五郎

町内のご意見番がまだ無言
闘犬を月の名所の土佐で見る

青森市 木村忠一

本四橋地下の誰かが苦が笑い

盆栽の切りたい枝が切られない

前月分

三重県 川上 富子

一月の三分の一ほど子を想い
トゲ見せぬ角度をバラは知っている
満腹になったら腹立ち消えていた
原色を着れば心が癒えるのか
裏通り女の疲れがたむろする

☆

名古屋市長 鈴木 可香

ラジウム温泉適応症が多すぎる

焼酎漬にせよと母から梅届く

税務署に目をつけられたペンネーム

人に言わせれば横道かも知れず

世話好きの心のドアにかける鍵

大洲市 米沢 暁明

マンションを目じるしに來いその裏だ

嬉しさは招待客がみなみえる

駅弁もだんだんあせる地方色

岐阜市 市川 鱗魚

針坊主ちゃんと母にある逃げ場

二人三脚夫は妻をいたわりつ

一生は砂文字妻とためねば

殺すぞと葉は書いてない怖さ

川柳塔社53年度

二賞発表句会と同人総会

日時 10月8日(日)

午後1時 開場
午後2時から 同人総会
午後5時半から二賞発表

会場

大阪府中小企業文化会館(五階五二号)
天王寺区上汐町五丁目二五番地・地下鉄谷町九丁目
下車南三百米(電話七七一・四〇九六番)

柳話

☆路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題

「根」 野村 太茂津 選
「宿敵」 橘高 薫風 選
「笑顔」 黒川 紫香 選
「主役」 西尾 朶 選

(二題・題と選者は当日発表・各題三句)

席題

会費

五百円
懇親宴 会費二千円・4時から5時まで・どなたもお気軽に
ご参加ください。お申込みは 10月3日までに岳人
宛。

主催 川柳塔社

秀句鑑賞

—前月号から—

西田 柳宏子

猛暑、炎暑も体温を超える三七度を上廻る日が続き、夏バテ知らずの筆者のペンも鈍り勝ちです。作者、選者へ失言。御容赦。

一、先ずうまいなあと思った句

無罪放免コーヒーがうまい

梅本 登美也

かつお鳥いきなり海につきささり

池田 香珠夫

出張の男仮面のままで寝る

辻 文平

二、次に鋭いなあと思った句

脅迫状書くえんびつを尖らせる

川上 富子

真実を歪めてペンが冴え返る

中村 優

ずけずけと物言う人の民主主義

山下 勝一

三、面白い観方だなあと思った句
考える蛙ポカンと浮いてみる

管財人積木の高さを制限し

矢野 佳雲

神様と握手よ鈴のひもを引く

欄 蘭

快適に環状線の昼寝かな

松垣 岩光

鳩が二羽降りそねた屋根にいる

白石 潔

四、心に応えるものをもつ句

子育てが済めば悪女に戻りたし

宮尾 みのり

砂時計じわじわ決断迫られる

川上 富子

諍が聴えないから胃に籠り

北野 久子

ネックレスで飾り私に音がない

桑原 狗治

雑草の味方になったバラの刺

坂口 公子

五、身辺句として共感を呼ぶ句

不便故先に逝くことと夫が言う

有田 鹿の子

遠廻り無駄でなかつたことを知り

宮尾 みのり

殊更に言葉飾って負けている

木村 忠一

お土産が苦面つかずに行きそびれ

岩道 博友

案内状の返事が来ないと電話する

岩道 博友

六、ほのぼのとした句ユーモラスな句

一日を控え目にした娘と疲れ

福本 美子

明るい近代娘か窮窟に、神妙にした一日、

それは言わずと知れたお見合の日……つきそ

う母の実感……倅多き明るい便を待っている

すよ……

この印鑑欠けたところが俺に似る

波 ただお

何かみじめなような表現に一層ほのぼのと

したユーモラスなものを感じます。愛着をも

つた自分の印鑑の……いつ欠けたのか一部が

……何やら自分の性格を暗示しているよう。

腕のない怪獣もちゃ箱で死ぬ

川上 富子

テレビのコマーシャルに「僕のタカラモノ」というのがある。おもちゃ箱は子供の宝物箱だ。言い得て妙……。

七、佳句

肩書を消せば自由を取りもとす

山根 喜代美

若者よ馳けるよ虹が消えぬ間に

杉浦 婦美子

さて私の好きな 二句

雑巾を固くしぼって掃除好き

江副 二牛

古い着想かも知れないが、端的にうまく表現している。掃除好きの母が目に見え

つまずいた石の角にもある丸み

石井 さわ子

何か禅の悟りにも似た心境が心憎いまで私の心を捉えました。

愛染帖

橘高薫風選

バイバイする妻に幼い顔がある

倉吉市 奥谷 弘明

大臣が架けた橋だとまだ信じ

岡山市 川端 柳子

遠雷に愛した人の影しばし

米子市 八木 千代

無理をした笑顔に秘かなる祈り

赤ちゃんの指にあやうく引きずられ

大阪市 河野 君子

献立が冴える白磁の皿の艶

姑となる傘はひろーい折り畳み

神戸市 和田 恭子

冷蔵庫から生れる母の愛もある

少年の夢が叶った夏の雲

大阪市 小出 智子

魂を抜きとられたる大花火

生みの親と言うは哀しき手毬唄

大坂市 高橋 夕花

母に逢うた夜は関節に音がある

落日に私の刻が消えてゆく

八尾市 羽原 静歩

一本の樹にからまってゆく友情

能面をはずした素顔も美し

守口市 岩田 美代

ひとときの幻覚眼鏡をさがす

ある日の謀反赤信号を突っ走る

富田林市 黒川 紫香

八月をゆっくり歩いて心きまる

停年へ後ろ姿は見せまいぞ

尼崎市 黒川 紫香

欠点をつくが直せとは云わず

京都市 松川 杜的

法話途切れて娑羅双樹の落ちる音

今治市 月原 宵明

野良犬の目に飼犬はよく眠り

守口市 野呂 右近

とりどりの警報器つけ暮潮の城

西宮市 朝山千世子

夏の風邪拾って帰る終電車

濃あじさい情事の過去は咎めまい

岡山市 出原 敬一

負けて勝つ姑は無言で趣味に凝り

深甚の謝意へつらなる以下同文

枚方市 宮川 珠笑

美しい涙も知ってるバーの椅子

妻何を目論むビールを所望して

堺市 高橋千万子

兼農の勤め帰りへ青田風

矢もたてもたまらず書いて未投函

和歌山市 若宮 武雄

値ははるが父の笑顔を買いたい

保護色をおどけと見てる第三者

兵庫県 辻 文平

喪虫の悟った振りが憎くなる

水泡の早く消えるを競い合う

米子市 小西 雄々

幸うすき人よと見るは他人の目

住民の力に勝てぬ原子力

豊屋川市 柴田恵美子

泣き事をこれから言わぬ千羽鶴

倉敷市 水粉 千翁

青森市 工藤 甲吉

和歌山市 西山 幸

鳥取市 河村 日満

八尾市 宮西 弥生

兵庫県 遠山 可住

和歌山市 西山 幸

鳥取市 河村 日満

八尾市 宮西 弥生

兵庫県 遠山 可住

兵庫県 遠山 可住

朝顔になったゆうべのしゃぼん玉

兵庫県 遠山 可住

冷房の中へもめごとをもって来る

兵庫県 遠山 可住

魂が入ると土鈴ひとを待つ

兵庫県 遠山 可住

肩叩き甘い稼ぎの金をやり

兵庫県 遠山 可住

昼を呼ぶ声が突ってペンを擱く

兵庫県 遠山 可住

少しまじめに鏡を見てる秋の風

兵庫県 遠山 可住

彼岸花の道で爪先冷えてくる

兵庫県 遠山 可住

満月に泪の光る千羽鶴

兵庫県 遠山 可住

島を四つ盗んだ赤い手の不遜

兵庫県 遠山 可住

太宰がわらうアメリカの桜んぼ

兵庫県 遠山 可住

あじさいの薄紫のせんなくて

兵庫県 遠山 可住

朝夕に一個のダイヤたしかめる
ボーナスが出ます朝礼のいいムード

東京都

村上由希子

観劇に四十女の多い屋
ゴルフ礼讃草の青空の青

宝塚市

吉田 笑女

義理果たす出費へボーナス待ちこがれ
今日こそと思う出足をくじく雨

富田林市

中村 優

会者定離後の席は泣き上戸
空瓶を並べ小鳩は花を挿す

鳥取県

鈴木村諷子

身についたその放浪の空で死に
宿帳に本名を書くてれくささ

京都市

都倉 求芽

回り椅子ようやく半回転の視野
気のいい風が僕の部屋吹き抜ける

鳥取市

中森葉士人

八月の議論へ裸にもなれず
底のちびた靴だが道は間違えず

羽曳野市

麻野 幽玄

石段の途中で迷う神頼み
安住の地を得て苔をまとう石

新宮市

大矢 十郎

銀行から粗品の中のCが来る
一瞬の眼がふたみこと物を言い

伊丹市

樫谷 寿馬

ストレートで焼酎を飲む無念かな

鳥根県

岩田 三和

山寺で考えぬいて辻に立つ

東京都

山根 白星

逃げ足の早い青春だったもの

鳥根県

小砂 白汀

雨だれがトラトラトラと打つ深夜
散漫と星を見つめる通夜帰り

八尾市

大路 美幸

白い雲最後の筆たんねん

神戸市

来住タカ子

色街に育ちうちわの使いよう

堺市

玉井 邦晴

夏薄地大事な箇所は透けてない
里帰り鳩が飛び出す古時計

出雲市

板垣 夢酔

あばら屋を頼るほか無い注意報
不機嫌な色であじさい鉢で咲く

生駒市

草深 醉升

雨にただれたあじさいお前は娼婦
枇杷を刻くと淫らな夜が甦る

高槻市

若柳 潮花

共に来た思い出よさる旅にいる

東大阪市

谷垣 史好

吊り皮を握った形で目が覚めて
手紙書き終えると少し寒い風

寝屋川市

小林鯛牙子

六十路の反旗ムーミーの色を選び
金魚飼おうとある日突然妻が云う

神戸市

宇佐美和子

石垣 花子

米子市

越村 枯梢

六月の雨に六月の花開く

和歌山市

津田 与史

倉敷市 小幡 里風

定刻へちよつと照れてるニールック

尾鷲市

渡辺伊津志

タイトルのようにストライプが歩く
願いごと聞いて呉れない星もある

川西市

戸田 古方

類のない死にざまなどを考える
風鈴よ鳴れ鳴れ妻が昼寝する

京都市

山本規不風

愛は深まる切れる鎖と知りつつも
心にも栄養旅で蘇り

大阪市

江城 修史

眞実に触れた痛みのアイシヤドウ
ふとん干す母の匂いも恋しくて

大原市

小谷 葉子

雑兵の一生裏道ばかり行く
本能が片方の乳房離さない

米子市

林 瑞枝

藤原 桜山

鳥根県 榎原 秀子

東予市 小山 悠泉

鳥取市 北野 天人

寝屋川市 江口 度

兵庫県 川井 白峯

八戸市 加藤 春夫

今治市 園部 正則

尻叩くように青信号光り

岡山市

井上柳五郎

チラチラとふり向いて見るから抜かれ

大阪市

新川 貞祐

こそばゆい善意の席の長い足

平田市

久家代仕男

牙を研ぐ男の意地を見せず逝き

八戸市

小泉 紫峰

実権は専務社長は孤に籠る

鳥取県

清水 一保

お中元と書けば贈賄とは云わず

和泉市

西岡 洛酔

ぼっかりと空洞妻の留守を待つ

大和郡山市

森田カズエ

手をついて頼んで事がはこぶなら

今治市

矢野 佳雲

千年を見つめ埴輪の月の空虚

長崎県

村崎 三車

匿名の投書いかにも筆が立ち

倉吉市

野中 御前

趣味で飼う猫も履歴を持つてくる

藤井寺市

西 いわを

軽やかに袖をはらませ街へ出る

松江市

黒目 大鳥

大義名分いさぎよく勇退す

和歌山市

松原 寿子

振り向けば胸の隙間へ思慕走る

大田市

藤田軒太楼

心中に期するところあり黙秘権

岸和田市

池田香珠夫

海はうずき遠き少女の日を鳴らす

大阪市

北 勝美

パンを焼く色にも好みある夫婦

唐津市

田口 虹汀

南風が吹く何処までつづく蟻の道

出雲市

高橋可保留

強欲もこれつばかしの壺の灰

藤井寺市

中原比呂志

半歩だけ退れば世間広く見え

旭川市

朝倉 大柏

職安の長椅子ふたり啞でいる

山口県

高崎 雀声

登山靴内外の山知っている

唐津市

新岡回天子

薪にもならぬ蜜柑は案じられ

倉敷市

齋藤 通風

石積んだ涙に石は無言なり

大阪市

欄 蘭

商魂は一たす一を三にする

唐津市

岩崎 実

ぬか漬を買ってる妻へ愚痴一つ

伊勢市

山本 光男

美しき花盗人は裁かねば

唐津市

田中 紫浪

野良猫に飼う猫春をさそわれる

倉敷市

中島 彩平

晩学のペン重きとき火熾狂う

鳥根県

角 耕草

橋渡る青田の風に押されつつ

岡山県

池田 半仙

生田斐をベレー帽だけ知ってくれ

大阪市

岩井 公平

お玄関で失礼します長話

長崎市

岩崎 和子

身に覚えあつてそこらは眼をつむり

岡山市

岩道 博友

肩籠へ妥協の話を捨てにゆき

唐津市

松垣 岩光

空梅雨を恨み豪雨をまた恨み

唐津市

三浦ひろ坊

薬漬けはゴメン風邪ひき寝てなおい

呉市

山根喜代美

どん底の視野へかかった虹の橋

松江市

梅本登美也

学力はピリで喧嘩に手が早い

鳥根県

飯塚 虎秋

かけ引きのない秒針の音は冴え

八戸市

島田 昭治

政界を墨で書いたら立派な松

羽咋市

三宅 ろ亭

過誤のもと過信のせいとやっとなり

大阪市

白石 潔

達筆家気軽に代筆引受ける

岡山市

砂田 静佳

手術前出来てた覚悟又ゆれる

出雲市

園山 栄

知らなくて円が高いと嬉しがり

熊野市

坪田 冬花

自分にはすぎた嫁です美人です

倉敷市

桑原 掬治

古ミシン捨てるは惜しい部屋の隅

倉敷市

中津伊勢吉

バーゲンで半値のうそを買わされる

評釈
古川柳の味

八木摩天郎清記

古郷へ廻る六部は氣のよわり

異郷の土になることはたまらなく悲しいことである。旅から旅へ、神社から神社へ仏閣から仏閣へと巡拝こそはしてけれど、この安心はなかなか捉えることが出来ないのであらう。急に故郷が恋しくなり、予定を変更して故郷へ向った六部の心理を掴んだのである。人間の弱いところの一面が遺憾なく出ている。

本陣になって出て行く雨やどり

もうあがるだろう。もう少ししてはあがるだろうと雨宿りはうらめしさうに空ばかり睨んでいるが、本降りですらしてもあがる見込みがないと知ると羽織を裏返して頭から被ったり、手拭いを頭の上にせたりして、ポツポツ出てゆくもの。雨宿りの光景がよく出て

いる。

人の物ただ遣るにさへ上手下手
他人の物を無代で遣るさへ上手下手があるというように解釈している人があがるが、それは間違った解釈である。この句をはつきりさ

せるためには「人の」と「物ただやるにさへ上手下手」の二つに切って考えればよい。つまり「人の物」でなく「人の」である。「人の」は「人間は」というのと同じ意味で、人間というものは他人にただで何かやるにしても上手下手があるということを通つたのだ。下手なやり方をするに「へん、これっばかし」のものを呉れて、偉そうに云つてらあ」と陰では悪口をいう。人間というのは不思議なものだ。

冬の田はわさびおろしのやうに見え

稲を蒔ったあとの冬田は、その根が行儀よくならんでいて、まるでわさびおろしのようだと云つたのである。滑稽な見方がこの句の興味だ。

松原の茶屋はいぶるが景になり

てくてく歩いた昔の旅にとつて松原の茶店は沙漠のオアシスであった。疲れた足を休めてくれる茶店が行途の松原に展開されて来たとき、その茶店から立ち上る煙は、なつかしくうれいものであったであらう。また青さの残っている松葉を燻べたのであろうか。遙かの向うには海がのぞいている。山にはきらきらと残んの雪が耀いている。それも自然の美しさである。こうした松原の景色は月並な景色ではあろうけれども、旅するものにとつては矢張りうたれずにはいられぬ景色なのである。

昭和53年度 大阪文化祭

第30回 川柳大会

日時 10月22日(日) 10時開場
会場 中央公会堂(3階小集会室) 地下鉄「淀屋橋」中之島公園内

講演 「大阪に象がいた頃」
大阪市立自然史博物館長

兼題 「ワニ(鰐)」 橘高 薫風選
「近頃のニュースから」 千地 万造氏

「息子」 松谷 政俊選
「川」 磯野いさむ選

「マニア」 谷口 光穂選
「友情」 永田 帆船選

席題 当日4題・各題2句・締切1時
・出句は出席者に限りです

賞 (兼・席題共、当日会場です)
兼・席題の秀句に府知事・大阪市長・府市教育委員長から「川柳賞」選者から「選者賞」を贈呈。

句集 入選句集代三百円、当日申込受付

主催・大阪府・大阪市・大阪府教育委員会・大阪府教育委員会
協力・各柳社―協賛・日川協

常任理事会

余聞録

◇一体常任理事会では何をどんな具合に話し合うのか、同人諸君にも多少は興味のあることと思うが、何しろ集る連中のどれもがくせある、どちらかと云えば口から先に生れた人ばかりなので、会議は終始談論風発うまいしやれや野次を伴奏に、しゃべる度に一言多いのも混って賑かである。

一三夫さんから議題が出されるのが例であるが、よくもまあ毎月色々あるもんだなと思われる程だが、問題に対する意見の交換は極めてまじめである。口は悪いが川柳塔を愛することにかけては人後に落ちない連中はかりなので、案外スムーズに衆口一致して結論が出るのが普通である。が、どうしたことか三月の理事会は何となく、悲壮な雰囲気にも包まれた、いつもとは大分様子のちがった会議になった。

是非同人諸君にも聞いてほしいので敢えてリ・ボイスする訳である。聞いて貰って川柳塔の危機感？に共鳴を載き併せて同人意識の高揚に資してほしいと思うのです。

◇経理担当理事から、今期の決算書が回された。●えらいこっちゃ、こんなにも累積赤字がたまってまんのんか●そうでんね、今のよな経営状態ではこの赤字が毎月増えることがあっても、減るめどはおまへんな●どうしてこんなにも●例えれば毎月の句会でんな、〇人以下では赤字、〇〇人来てくれてトントンですわ。最近会場費が少し安くなったのと案内のがきをやめたさかい、まだこれだけでまね。●雑誌の単価は？●一冊の実費が〇〇円かかります。〇〇円で買ってもろて送料だけが赤字になる勘定ですわ●議論ばつかししとつても仕方ない。何かいい案おまへんのか●私が先達で提案した「理事の人には一冊余分に買うでもろて、それを活用して同人や読者を増やして貰うのどないだ●理事が一部余分に買わされることには抵抗を感じますね。一部を利用出来る人はよろしいけど全然利用出来る人には全く無駄でっしゃろ。それに同人雑誌の性格上、特定の人だけに犠牲を強いる事には問題があると思えますな●待つて下さいよ。〇〇人の理事が全員一部余分に買うとしてです。〇〇円×〇〇人で〇万円です。焼石に水です。●一寸皆さん待つて下さいよ、この雑誌一部貰うてでんな、毎月〇〇円の会費でこない楽しいが老後まで出来ますねんで、大変安いもんやと思いませんか、今日び子供供かて月に〇〇位の小使もろて喜びまっか。うちの娘も花やお茶習ろてまっけど仰山要りまっせ。尺八でも謡でも何一つ習ろたかて〇〇円はかかりまっせ。真

実〇円は安いもんでっせ、ほんまにどうです思いきつて〇〇円にしたら●同人費の値上げが一番安易な方法やけど。以前川雑時代に会費上げたら途端に会員が減ったんですわ●同人費上げるとなるとよその釣合いも考えて見んと、よそはどれ位とつてまね●××が〇円、△△が一番安くても〇〇円というとりました●××が〇円のうらだだけが〇〇円にするのは一寸問題でんな。値上げしても同人が減ったんでは困るしな●要するに同人雑誌というものは、われわれの雑誌であつて、困つたら同人協力して盛り立てるといふ、徹底した同人意識をもたなあかんといふことですから●その通りでんね、もつともつと同人意識の高揚にお互い力を入れにやいけまへんな何れにしても会費値上げとなるとこだけで決定出来るもんやなし、何れ臨時同人総会で承認を得る必要がありますね。〇〇円の値上げがすんなりと無修正で通りまっしゃろか●いきなり提案したんでますまいですな、じわじわと根回しが必要でっしゃろな●どうです。今晚のこの悲壮な涙ぐましい会議の録音を、座談会形式に書き直して雑誌で皆さんに訴えるというのは●座談会形式ね。ええやないか、やつて見ようや●ところでそれを誰が書くね●やつぱり言い出しべえの君が書いてらどうやねん。●そんな殺生な。

◇とまあ以上が当夜のやりとりの概要だが、何れ十月の同人総会の当日あたりに、危機突破同人総会が持たれそうな感触であるが、その節はなるべく大多数の同人に集つて貰う

て、こうした問題について徹底的に討論を載
 き、いい結論を出していきたいと思う。何も
 会費の値上げだけが万能薬ではないと思うの
 で、同人諸君の衆智の中から奇策妙案を見つ
 けたいと思う。汗を出さず人は知恵を、知恵
 を出さず人は汗を出せというのは、どこかの
 企業の社是であつたらしいが、川柳塔社では
 汗を出すこともそうそうはなくて、思わぬ句
 が天にぬけて冷や汗を出す位が関の山ですか
 ら大いに知恵の方をしばってほしいと思う。
 同人の、同人による、同人のための同人誌川
 柳塔は単なる作品や、社会や政治へのうっぶ
 んや自己の反省や心境の発表の場所としてた
 けてなく、もっともつと大乗的な川柳の発展
 と川柳の社会化という伝統ある、路郎イズム
 の実践の場としての使命も荷っている訳であ
 る。この大目的のためには何としても、一人
 でも多くの誌友を得るべく最大の努力をして
 行くべきであつて、反対に一人の誌友をも失
 うような施策にはブレーキが必要であらう。
 勿論経営の合理化、冗費の節約などの企業努
 力にも創意を注ぐべきであらう。同人誌友諸
 君からの変らぬ指導と鞭達を望みたいと思
 う。

(註)伏字の部分は同人総会で明らかにします)

(R・H生)

柳 信

直原 七面山

六月十五日私の第四の句碑

〃子を抱いてこの幸福よ続けかし〃

が久米南町の中央公民館(西日本川柳大会
 場)から五〇メートル岡山寄りの国道五十三
 号線の西側(級友平賀山崎パン店の前庭)に
 建りました。除幕式は名勝七面山のお滝様の
 境内(家より一五〇〇メートル上流)に建立
 される第五の句碑

〃滝つぼのここに始まる泉川〃

と共に十一月三日(文化の日)同時除幕の予
 定です。泉川は拙宅の直ぐ南側を流れている
 川です。

なお第六句碑は年末までに久米南町神目の
 五十三号線ぞいに建つ予定で句は

〃なにもかも太陽へ向く恐ろしさ〃

にしたいと思っております

番傘川柳社創立70年記念

全 国 川 柳 大 会

日 時 昭和53年11月19日・正午

会 場 コクサイホテル(大阪市東区内

本町)

講 演 (川柳塔社) 中島生々庵
 (ふあうすと川柳社) 増井不二也
 (時の川柳社) 三条東洋樹

記念式典(第一部)

あいさつ 本社主幹 近江砂人ほか

祝 辞 日本川柳協会長 片山雲雀ほか

表 彰 岸本水府夫人ほか

宿題(第2部)

中 年 田中 南桑選

耳 年 田向 秀史選

此 光 田中 南都選

自 信 定本 広文選

さ さ や き 佐伯みどり選

道 路 日下部舟可選

自 信 片岡つとむ選

道 路 岸本 吟一選

記念パーティー(第3部) ホテル8階宴会場

— 記念バスツアー — 11月20日

NHKドラマ「黄金の日々」

堺市史跡名所観光

— 記念出版 —

「近江砂人川柳集」

長 寿

集 林 瑞 枝 選

日本一長寿の顔は仙人めき 多賀子
腹八分守れと長寿箸が言い 句味地
達筆で色紙に長寿の字が光り 冬花
報恩感謝長寿豊かな顔を持ち 明朗
インタビュール長寿の秘訣聞いて来る 春日
しやしやら孫連れて目出度い渡りぞめ 御前
菓仕事長寿の祖母の指さばき 可保留
長生きをうけあいますと易者の灯 カズエ
美衣美食なくとも村の最長寿 紫浪
故郷へそろそろ帰りたい長寿 克枝
世話かける長寿が受けている 敍勲 雅風
養生訓説いて長寿はまならず 公平
七十の娘奴使う老母達者 洋々
物知りの古老に知恵を借りに来る 越子
何か知らお役に立っている長寿 規不風
かくしゃくと日露の兵の詩吟聞く 眺明
喜んで貰えるはずの長寿泣き 秀峰
有難い法話と思う長寿僧 度
いきいきと若者凌ぐ長寿村 炬齊
早寝早起長寿へ耐が一台で 古方
長寿の秘問われ恥し粗衣粗食 勝美
還暦の海女までもぐる長寿村 花子
長寿の静肩のトンボも逃げもせず 無聖

まだ古稀を過ぎたばかりと祖母若し 岩光
勘当の子も親米寿が招き寄せ 杵童
敬老の日が済み長寿また孤独 きく子
子に泣いた苦勞笑える日の長寿 茶人
平凡な暮しへ長寿与えられ 宵明
古箏筒長寿の部屋にどしり座す テルミ
へエそんなお歳と年令に負けてない 凡九郎
覇氣棄てて長寿互にかばい合 亭
亡き父を越した長寿の第一歩 裕
百歳でもんべの糍も当てている 里風
散る花へ想いを馳せている長寿 光男
夫婦とも長寿揃って陽を拝み 七面山
孫がもう次の長寿をねらって来 一進
首孫に嫁来る自慢の髭を撫で 右近
ほほ笑むと神に近づく喜寿の顔 伊津志
長寿する足場は子等が踏み固め 夢酔
初孫は長寿にあやかる名をつける 夕路
世の中のニュースにさっと生き長寿 実
金婚式済んでも若い歎をとり 回天子
佳
ヨーグルト知らず世紀を味噌で生き 信二
長寿一家どっちが父やお祖父やら 勝一
補聴器もいらぬ長寿でうるさがられ 軒太楼
金婚へ風雪堪えて来た歩巾 優
陽だまりの長寿のひざへ蝶も舞い 隆子
人
戦死した息子の分も貰って生き 本蔭棒
地
ある時は馬鹿にもなって居た長寿 素身郎
番付が上って長寿淋しがり 無人

稲

軸
この孫と酒酌み交わす長寿欲し

村 上 春 巳 選

機械植えの苗見るからに文化めき 七面山
青稲田おらが天下と鳴く蛙 里風
稲雀案山子の脚で羽繕い 虹汀
稲刈りに新嫁さんのコンバクト 克枝
天と地の恵み満喫して稲穂 悠路
離農する決意最後の稲を刈り 泉
稲三株植えて絵日記書きはじめ 佳雲
豊作に親子スズメの平和な日 深星

初歩教室

題 — 「知」 —

本田恵二朗

陶芸家(備前焼)で人間国宝でもある藤原啓さんは、作陶で最も苦心されるのは、どんなものを作る時ですかとの問いに答えて、それは最も簡単なものを作る時が一番苦心すると云われている。複雑なものほどゴマカンが効くからやさしいのだとも云われている。文芸でも十七文字で描写するものが一番むづかしい、三十一文字となると少しやさしくなるのと同じだよとも云われている。そこで最も簡単なものという意味の深さを考えてみなければならなくなる。簡単ということは簡明ということに通じるが、簡明ということが作りやすいということにはならず、逆に作りにくいということになる。そこに深さがあるらしい。一見して飾り気がなく素材そうで、平凡そうであるが、落着いた心眼で、じつと眺め続けていると、言葉では表現のできない味が湧き出したり、奥ゆかしい艶が見えて来たり、いつまでも飽きのこない何ものかが心にしみ込んできたりする。ゆたかな芸術作品

とはそんなものではなかるうかと、凡人の私にも想えてくるのである。多彩に演出した句と、さりげなく描写した句との相違を比べて掘下げて玩味する力を練成したいものと希い続ける私である。

年寄の知恵は今でも生きており
(年寄の知恵調法に生き続け)

本当の気持ち云えないうぶとうぶ
(本当の気持ち云えないうぶとうぶ)

磨くほど艶増す知恵の壺である
(磨くほど艶増す知恵の壺である)

知恵の子に母は大きな夢をもち
(知恵の子に母は大きな夢をもち)

何事も知らぬ顔して丸く生き
(知らぬ顔して丸く生き)

支え合う妻の助太刀影の知恵
(老妻の知恵を支えた今日が生き)

太宰府に知恵を借りたい学期末
(年金に知恵を絞って老夫婦)

誠実を神だけ知ってそれでよし
(誠実を神は知ってそれでよし)

良心が知っているから励んでる
(良心が知っているから励まねば)

点取りと知らず上役手を噛まれ
(点取りと知ってまんまと手を噛まれ)

見くびった知識に軽く寄り切られ
(見くびった知識に五歩先き教えられ)

真実を知っているから聞いかけず
(真実を知っているから聞いかけず)

(その裏を知っているからとほげとき)
物知りの祖母へ朝から駆けてくる
(物知りのばあちゃん調法がられる)

孫のする仕草で娘の倅を知り
(娘の幸を孫の仕草に知らされる)

中心が知りたくて頬を撫で
(里の風僕の頬だと知って撫で)

古里の風は知って頬を撫で
(無知な母ですだませないだませず)

返えさぬを承知で親は脛をか
(返えさぬを承知で脛をか)

恋人に知られたくない過去があり
(知足安分知らぬ過保護が殖えに殖え)

声かけられた旧知の名前が浮ばない
(君づけで呼ばれ旧知の名が浮かず)

知り過ぎてだんだん仲が悪うなり
(知り過ぎてた仲溝ができ溝ができ)

知らぬ事になつてる上長の太い肚
(知らぬ顔している上司の太い肚)

知人宅までもマスコミさぐり出す
(知らぬからこそのはほんと世を渡り)

知らない方がよかつた勝った味
(知らぬ方がよかつた勝った味)

思ひ知る背中を見せて消えてゆき
(思ひ知ったよと背中に書いて去り)

有難きもにくたらしさも知った銭
(知にたけて先取りせんと前のめり)

(知にたけて先取りせんと勇み足)
悪玉と知将を抱え天下人

大 萬 川 柳

「きっかけ」

入選発表

選者 川村好郎

投句總数 三百五十三句

入選 六十一句

きっかけを二人の愛で温める

鳥取 静 泉

冷えた茶を前にきっかけ待っている

東大阪 美 子

きっかけとなればうれい老婆心

倉敷 桜 山

きっかけを掴む心にあるあせり

大阪 勝 美

手洗いをきっかけにして下戸は消え

藤井寺 吸 江

手鏡の奥できっかけ考える

兵庫 文 平

てはじめに穴馬当てた腐れ縁

宝塚 静 馬

貸せなんだのがきっかけとなる疎遠

豊屋川 小 路

きっかけで溶ける心が嘘のよう
和歌山 としよ

借金に来たとききっかけ掴ませず
大阪 千 子

きっかけがつかめず盃重ねてる
豊屋川 度

きっかけがこわい国境のバリケード
大阪 弘 生

失恋をきっかけにして金を貯め
八尾 鬼 遊

立直るきっかけ恵んでくれた鞭
和歌山 武 雄

きっかけの頃のペン先みずみずし
和歌山 寿 子

きっかけがおんな心にまといつき
豊屋川 惠美子

きっかけがなくて冷戦まだ続き
富田林 花 梢

きっかけが崩れても積む思慕の石
交野 茂 児

陸橋の予算組ませた悲し事故
和歌山 寿 子

きっかけを逃さず売ってる土根性
堺 一 二三

きっかけを糾明すれば愚痴となる
米子 越 子

きっかけは点字教えてくれた人

倉敷 筒 子

タレントの離婚きっかけなどいらぬ

和歌山 英 子

きっかけはたわいないこと老夫婦

奈良 保 夫

きっかけが出雲の神に見えてくる

大阪 文 秋

きっかけを足で稼いだ老刑事

大田 軒太楼

きっかけはどうだつてよい今の幸

熊本 一 進

きっかけがなく片恋にまた終り

倉敷 素身郎

きっかけを上手にかむ酒を提げ

米子 雄 々

斗病のきっかけ聖書捨てきれず

東予 悠 泉

きっかけが欲しい二人の瞳がからみ

尾鷲 伊津志

きっかけの言葉口から出たがらず

鳥根 早 苗

立ち直りその気にさせた母の文

呉 英 詩

きっかけをどこでつかんだ玉の輿
熊野 冬 花

きっかけがあれば反旗胸で揺れ
長崎 和 子

きっかけを待ってたように父も折れ
米子 千 代

溶けそうな笑顔できっかけつかませず
鳥取 露 杖

きっかけがつかめず雑談して帰り
いざこざを流すきっかけ撰る焦り
きっかけを逃して平行線のまま
きっかけの映像いまだ抱く男
きっかけもつかめず過ぎるおぼろ月
きっかけを問われて急に吃り出し
きっかけを待つ朝ごとの片想い
きっかけは教会の扉が開いていた
きっかけは線香花火のような過去
きっかけの去来を凡人見てるだけ
きっかけへ今日も埋れ火抱きつつ
花道を去るきっかけを考える
佳句 奈良 本蔭樺

きっかけは何であろうと共白髪
東予 悠 泉



お お や ま

大 山 と 金

雅号ぶつちやげばなし

と き ん

(172)

六十一歳の還で曆、ふと浮んだのが「と金」でした。還曆で曆と金も歩の裏返りは毎年一つずつ若返ってゆけばいいのになアと夢を見たくもありません。もう一度出直したいと思うことも何度かありましたヨ。古来六十耳順、七十矩をこえずと謂われていても、孔子ではない自分は相変らずの早合点と、そそっかし屋で、もつともつと落付きとゆとりを身につけたいとは思っていても生来の性格はどうにも、どうしようもありません。やはり「と金」も元は歩なんですネ。大事にする金将にはなれず、使い捨ての軽い軽い歩ですが、これも無くてはならぬものと思えます。

職業建築技術者(会社員) (七十歳)

NHK川柳募集

課題 「明日」川村好郎選

送り先 ハガキに三句以内 締切九月十日

NHK近畿本部「老後をたのしく」

係

発表 九月二十三日(土、祭日) 午前九時

十五分ラジオ第一放送(全国放送)

「老後をたのしく」の時間

岡山 凡太郎
きつかけの愛の言葉へ鈴が鳴る
和歌山 寿子
一人立つきつかけ待ってる通夜の
和歌山 正博
席 きつかけを作ってやって邪魔がら
岡山 金太郎
人ノ句
きつかけが欲しい一途な恋であり
大阪 真砂
地ノ句
きつかけに比べ他愛のない別れ
和歌山 和子
天ノ句

外孫が来てきつかけとなる和解除
倉敷 里風
選者吟
きつかけになりそう女顔出さず
昭和五十三年度
ベストテン(七月現在)
一 好一 一三〇 大阪
二 幸代 二二五 和歌山
三 千代 二二五 米子
四 恵祐 二二〇 堺
五 和子 一一〇 和歌山
六 花梢 一一〇 富田林
七 筒子 一〇〇 倉敷
八 一二三 一〇〇 堺
九 武雄
一〇 里風
一一 百酒
一二 文秋
一三 露杖
一四 正博
一五 どんたく
一六 美幸
一七 凡太郎
一八 真砂
一九 方大
二〇 静馬
二一 静泉
二二 本蔭棒

九〇 和歌山 二三 鬼遊 六、五 八尾
八〇 倉敷 二四 可住 六、五 兵庫
七五 大阪 昭和三十三年第十回 「出口」三句以内
七五 鳥取 締切 九月二十五日
七五 和歌山 第十一回
七五 神戸 「ふれあい」三句以内
七〇 八尾 締切 十月二十五日
七〇 岡山 投句先
七〇 大阪 〒593 堺市堀上緑町一―三一七
七〇 倉敷 藤井一二三方
七〇 宝塚 大萬川柳係
七〇 鳥取
六五 奈良

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹はこころと柳話攻めである。形水句集「谷町」を皮切りに、「番傘七十周年記念」から操子句集「千亀利」など。

▼直原玉青先生が読売朝刊(7月25日付)に「禪と南画」と題して、四十年前のことを書いておられた。まことに貴重な文章だった。

▼第12回山陰川柳大会が九月十七日午前10時から東伯町中央公民館で開催、兼題「再起・稲穂・牛耳る」を広げる。席題三点当日発表。各題三句。賞多誌。会費千円(記念品・発表誌呈。懇親宴男千五百円、女千円(懇親宴は閉会後希望者に)

▼兵庫県民川柳大会作品(53年度芸術文化祭)の発

表会が十月十八日午後一時から「兵庫県立のじぎく会館」で開催。堀口塊人氏の講演に「ゆらぐ橋本衛門七選」と「街一時実新子選」がある。会費三百円。主催・兵庫県・兵庫県川柳協会

▼大阪手帖八月号に高鷲亜鈍氏が、形水句集「谷町」を紹介、また形水氏の最近作が誌上を飾っている。

▼鑑賞川上三太郎単語(第二集)は三太郎単語集の中から15章をとりあげたもの。一人間陶冶の指針としての好著。頒価一部三百円。新津市本町一丁目柳都川柳社。

▼「風」季刊第16号・河野春三編集(定価五百円)発行所「高槻市竹の内町二二一」風発刊所。

▼「藍」季刊第8号・作品のほかに「川柳における伝統(軽み)の系譜」中川一の読み物がある。杉野草兵の「藍7号を読んで」の中で「爪を剪る音だけがある梅雨の店」大路美幸が紹介されている。頒価年四

回千五百円。発行所「福岡市中央区大宮二一三四」泉淳夫方・藍発行所。

▼川柳京かがみ第2号「冷や水・伊藤入仙」の文中で本誌の後記「ペンペン草」にふれておられる。隔月刊・半年分千円・発行所「〒605京都市東山区繩手通新橋上ル・伊藤入仙方」川柳京かがみの会。

▼若人忌川柳大会(8月6日開催)へ出席した大阪からの遠征組中、第一位岳人、四位小松園、五位葉諸氏だった。二位は三銘、三位日満、五位同点の秋友諸氏という成績。なお七月におこなわれた「第二回若人賞」では両川洋々氏が準賞を獲得された。

▼番傘のかつての編集者だった鳥居金矢氏が七月十六日に亡くなったことを同誌八月号の編集手帖「岩井三窓氏が書いておられる。ボクシングの評論家として故秋田実先生も高く評価されていたし、新関西新聞はかへも上方藤四郎の筆名で活

総合雑誌「川柳」 九月号好評発売中
定価六八〇円・送料120円

▼川柳への尊敬が足りない。入江相政/特別リレー座談会「御師走選者は困るネ」/一周年特別企画「線作家が語る川柳」第一回登場の本誌関係者は二田一三夫・本田恵二朗・野村太茂津・河村日満・尼緑之助/小説・柄井八右衛門/岸本吟一/中島生々庵賞用の骨董古柳は捨てる。/東野大八/中島生々庵推薦14句/など多彩。
発行所 〒154 東京都世田谷区三軒茶屋二一九 構造社出版株式会社

三条東洋樹編
句集「川柳兵庫」 頒価三千元 送料五百円

「兵庫県に於ける川柳の発祥とその人々」
「明石と川柳」 三東洋樹
「異人館異聞」 堀口塊人
紙に美しい。兵庫県選抜作家の合同句集がアールト氏によつて飾られたもの。
☆川柳兵庫の歴史がこの一冊にある。
発行所 神戸市兵庫区神田町四〇 兵庫県川柳協会

躍されていた。謹悼。
▽同人の動向△
▼西尾葉氏(八尾市)は七月十一日、交野の警察学校で六五〇名を前にして「川柳とところどころ」を一時間三十分講演され好評だったとのこと。
▼尼緑之助氏(出雲市)は四月から高松クラブ(ライオンズ同様)一五五名の会長を押しつけられ時間的に苦しいとのこと。なお奥様が病床にあり氏のご多忙さが目に見えるようである。
▼正本水客、黒川紫香両氏は九月二日出発でハワイ旅行、七日に帰国されるが二

賞決定句は早目に提出しなす。

▼若本多久志氏（西宮市）

から「またゼンソク発作で四、五日入院。只今自宅で静養中です。

▼高橋操子さん（岸和田川柳会）が刊行する句集「千亀利―ちぎり」とは岸和田

城の別称だが、目下編集部の不二田一三夫氏が形水句集「谷町」同様、選句から編集までいっさい任かされ大わらわである。

新同人紹介

福 <small>ふく</small>	有 <small>あり</small>	岸 <small>きし</small>
田 <small>だ</small>	田 <small>た</small>	本 <small>もと</small>
保 <small>やす</small>	と	無 <small>む</small>
子 <small>こ</small>	し	人 <small>じん</small>
日満・由多香・洋々推薦	由多香・貞山推薦	日満・寿馬・由多香推薦

両川洋々作。

▼柳楽鶴丸氏（松江市）から七月七日の路郎忌、八

日の堺市観光と摩太郎、水客、小松園諸先生ほか皆様にお世話になりました。

▼恒松町紅氏（松江市）は六月三十日付をもって昭和十二年八月松江郵便局電信課へ奉職以来四十一年間にピリオドを打たれた。ご苦

勞さまでした。

▼行吉照路氏（岡山市）は尾道駅の旅客助役として活躍中だが、「後楽吟社」と

「川柳ひら」の編集もさ

れている。

▼前号追加―P35上段一行目へ生きたる窓あるからぜんまい巻いている―島田昭治

▼前号訂正―P2―不孝詫び詫び下品下生の身を送る―西川誓二。

同人名簿作製について

電話番号などの追加原稿はスグお知らせください。
―編集部

（以內）投句は適当な句箋に

各一句毎記入、裏面に雅号記名、郵券百円同封―投句

先下三尾市高安町北一の二五大路美幸であて。

▼南大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題―悪魔・花嫁・レポート・手。

▼南海川柳会は21日夕六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題―秘書・たたり・拍子抜け。

▼東大阪川柳同好会は23日六時から東大阪市中央公民館2Fで開催。題―台風・別居・血圧・モンタージュ。席居当日二題発表。

★▼摩太郎氏の古川柳の味では「人の物」葵丘氏の目次横は「人に物」となっているが、どちらも調べた上の原稿です。

―編集部

▼菜の花句会は10日（日）夕六時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪線八尾

下車南へすぐで開催。会費三百円、兼題―怪物・奏でる・無力・ジャンボー席題

二題（兼・席とも各題五句

湯上がりの鏡世相に遠く居る
しんがりの湯上がり乾盃せかされる
湯上がりの客の言葉にそつがなし
湯上がりに冷えたビールよ飛んで来い
湯上がりにしては子どものうす汚れ
本当の自分湯上がりかかきさない
湯上がりの鏡にスリルがそそのかす
湯上がりに少したの絵になつたはずで
湯上がりの雪湯上がりのもつれ下駄
湯上がりの男の浴衣がうまし子沢山
湯上がりの男の浴衣にもある魅力
酔眼で湯上がりの盗む軽い罪
湯上がりのまま散歩する一人旅
声たてて笑えば湯の香の匂う人
湯上がりの女に騙されやすくなる
湯上がりに今日のさつきを見て回わり
湯上がりの女を額に飲めてみる
湯上がりへ寝た振りをする九官鳥
湯上がりの背伸びを幸せなものにする
湯上がりはバジャマと決めている夫

兼題「宿」

中川

滋雀選

宿浴衣縁と蠅の音が染みる
女中さんのお国訛りにある旅情
宿帳は出来合い夫婦とにらんでる
味噌汁の下から匂う木賃宿
一宿の恩義もあつた黙秘権
喜びの文字で宿帳書くふたり
男三人しみだらな宿の下駄
下宿の灯母の手紙を読み返し
本当の旅なら履こう宿の下駄
旅の宿眠れぬままに水の音
星の夜暫し葉末に宿る露
雨宿り私の姿は絵にならぬ

幸三十四
智子
庸敏
恒明
滋雀
小松園
美幸
洋敏
綾女
美幸
水客
小路
雀子
岳史
水客
夕花

宿からの電話手形を落とす打ち合せ
漁り火の見える宿から書く旅愁
私小説宿のおかみのことも書き
方違ひ神社へ宿替え言いに来る
宿変えてみても枕の硬い旅
一泊は妻に内緒の宿をとり
宿帳に無難な妻の名を借りる
温くも肌を肌で感じた木賃宿
来し方へ此の世も一夜の宿に似て
潮騒が子守唄です故里の宿
民宿の軒から秋がしのび寄る
野良犬で宿に困つたことほなし
宿帳へいつも夫婦と書いておく
ドヤの窓月は大きな傘を被る
夕暮れも雲の無宿は慌てない
安宿でよし焦心のひとり旅
定年の雀のお宿だれも来ず
さい果ての宿のろ端にある民話
宿浴衣裏切る罪を抱いている
青春の汗を下宿の窓に干す
文化から逃げて来まつた山の宿
蠅トンボと親しくなつた宿を去る
山宿で気楽な笛を吹いてくる
笑う家に宿を求めた青い鳥
つづまやか填生の宿に灯が明かい

兼題「裸」

高杉

鬼遊選

有情無情裸から合うコップ酒
ストリップ値上げをします人件費
先様へ済まぬ裸で取る受話器
満員車裸のピラが真正面
肩書を捨てて裸のお付き合い
裸婦に目ももう慣れました週刊誌
裸かと思えばスカートの紐がある
すってんになったと裸転げ込み

優人
岳花
潮路
小蘭
あいき
太茂
軒太

吸花
夕々
醉生
幸子
英子
規不
頂留
あいき
智子
君子
恒明
武雄
与史
小遊
糸馬
寿馬
与史
武雄
滋雀

第25回八尾市文化祭

市民川柳大会

とき・十月十五日(日) 正午開場
ところ・八尾商工会議所三階大ホール
近鉄大阪線八尾下車南西へ

約五分

柳話「俊徳丸の話ほか」 田中 好啓氏
席題(一) 中尾 漢介氏
兼題(蜂) 橘高 薫風氏
(祭) 菊沢小松園氏
(笑う) 伊藤 入仙氏
(種) 田中桂太樹氏
(人情) 三条東洋樹氏
(河童) 西尾 栗氏

▼各題二句。締切午後一時半。
▼会費その他次号で発表。

裸婦の絵を妻はエッチでかたづけける
 裸の娘もすぐ大人になるだろう
 裸には金貸しの齒も通らない
 パトロール二階の裸見で通りぬけぬけと裸で主人待ち構え
 裸より白淫溢れるほどがよい
 あつさり脱いで女優の卵です
 ヒロシマの焼けた裸を子に刻む
 赤裸シマの人情スラム街に群れ
 裸一貫華麗な過去は振り向かず
 どやどやの湯気に男の意気を見る
 男は裸に裸かたで変る裸婦の像
 裸のつき合いやつぱり恥部はおますね
 ケロイドに裸を強いる夏恨む
 川柳は裸体画ですと剣花坊
 女王の裸を思う軽い悪
 かくし芸お臍が口になる裸
 はだか天国野郎ばかりでつまらない
 ノードモデル女に生る道があり
 裸以上なりよがりな熱帯夜
 素裸の闘志だけがは生きられぬ
 裸は裸が似合う裸村
 心まで裸になれば打っちゃれ
 裸の胸に勳章はいらぬ人ばかり
 ペンペン草だつて裸に耐えている
 裸虫男と女のある暑さ
 裸どうしの対話にすこし嘘がある
 ゼニとれる裸にあらざ満三つ
 裸にもなれず女に裸帯夜
 星の光がふつと裸に見えてくる
 とは言えど裸のままで嫁つがせず
 王様は大人裸は許されぬ
 裸婦像に少年眩しいものを知り
 少うし考えてから裸になることだ

洋子 敏子 幸生 女 幸馬 静史 与史 美幸 寿麻 綾子 智酒 古方 武雄 古方 幸幸 美太郎 恒明 潮花 文平 宇太 雅風 生々 水風 恒花 夕客 柳信 好郎 失名 系葉 智子

裸一貫身に一円の借りもなし

兼題「粉」

笠原

吸江選

金策の足もたぬる粉吹雪
 メリケン粉田舎芝居の顔が出来
 米の粉のうどんお義理の試食会
 黄粉唇につけるボスでこわくない
 新盆へ迎えダンプの粉が溢れる
 黙々と名代を背負うそば粉練る
 ナンパ粉の時代を耐えた原爆忌
 はつたい粉幼なじみの童べ唄
 餅まぶすようにベビーのてんか粉
 粉を硬いた白に名残りの詩の跡
 ハッタイ粉故郷は遠くなるばかり
 火山粉塵これも観光資源です
 手の甲で拭く鋳物師の炭の粉
 玉砕粉砕土に還つただけのこと
 身を粉に動く愚かさだつてある
 殊更に火の粉をかぶる言葉選る
 粉骨砕身もう現代の死語になり
 優しさに思わずむせた粉ナ葉
 さらさら粉雪腕白坊主の唄がある
 粉飾に生活を賭ける夜の蝶
 粉雪が一途な愛を消して舞う
 磨き粉で心の錆は消し切れず
 石渡りの下手な二人の粉挽唄
 石臼を廻せばば豆の粉挽き唄
 葬送の茶碗悲しみを粉々に
 粉骨砕身退職金の表に無し
 乳を粉に育てし子供はそっぽ向き
 粉房には素直に譲る粉ミール
 粉わさび効かず話もない夫婦
 闇市の昔忘れたメリケン粉
 粉薬を呪文のように飲んでる
 風に乗る花粉デッカイ夢を抱く

鬼遊 登美也 軒太楼 枯梢 静馬 君雀 滋雀 与志 涼一 喜風 智風 萬的 幸太郎 古方 雀踊 水客 一三夫 柳宏子 君子 武雄 寿子 幸子 君子 太茂津 幸生 蘭馬 紫香 静歩 重人

岸和田市文化祭参加

第28回 市民川柳大会

日時 昭和53年10月22日

十二時半〜十七時

会場 岸和田市民会館地下ホール

柳話 川柳塔社主幹

兼題 「揺れる」

「無口」

「見習」

「持ち味」

「先生」

席題 当日二題発表(兼席題各三句)

呈賞 市長賞・議長賞・教育委員会賞

締切 文化協会賞・岸和田川柳会賞

十四時(出句は出席者に限りま

入選句集代 三〇〇円)

主催 岸和田川柳会

後援 岸和田文化協会

岸和田教育委員会

連絡先 586 岸和田市土生町一九八九

一八 高橋操子方

(電〇七二四〇〇四九)



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳東大版

斎藤三十四報

丸のみの事業不況に脆き知る
 トラの巻丸呑み入試までのこと
 信用をした丸呑みで共倒れ
 口上を丸呑みにして稚児芝居
 丸呑みの知恵で世渡りなど出来ぬ
 横やりは虚像の方を突かしく
 横やりの穂先を軽くかわす猪口
 正直な男で正面から狙う
 大物を狙うと雑魚がよって来る
 ユーモアがコミケイションの輪を広げ
 ユーモアのわかるかがしのモーニング
 ブラッケーユーマ哀し詩を秘めている
 ユーモラスな顔も並んだ石仏
 ユーモアも判らぬまんだ過疎に朽ち
 ユーモアで固さがとれた披露宴
 ユーモアで嫁と姑の仲ほぐれ
 旧悪露見ユーモアのある祝辞
 団交にまだユーモアも出る余裕
 道化師の涙はユーモアかも知れぬ
 ひよっとことおかめが踊る神楽殿

喜風 弥山人 三十四 綾女 度近 右近 かずを 滋啓 春皓 鎮彦 湖風 留蔵 眉月 良水 慶三 清人 雀踊子 川狂子

いずも川柳会

尼緑之助報

ただならぬ決起集会デモへ向く
 すがる胸もたぬ女の細い肩
 胸借りて泣いたあの夜と同じ月
 百姓に作る五穀が見当らず
 五年先読んで不便な土地に住み
 浜千鳥波の機嫌と戯れる
 拜んでも足りない罪を負うている
 胸張っているのは質上び迫る方
 神様の格で勅使が来て拝み
 産卵へ戻る海猫春を吸い
 海猫が飛来港が活気づき
 胸に住む鬼一匹をもてあまし
 一石を投じて波紋の外に居り
 理立地底にも波はひそんでる
 円高の景気の波にまだ乗れず
 ミサイルの向く方向に波が立ち
 沸る胸家の重みが蓋をする
 胸元にポイントを置くデザイン
 火がつけば鳥合の衆でも燃え上がる

紫吻 寿美子 きみえ 耕草 朱紅 独仙 芙佐子 正朗 草丘 孝華 代仕男 九二老 河南 千代 雄々 早苗 孝太郎 多賀子 緑之助 三和 千草 みのり 芳子 早苗 愚童 正朗 虎秋 孤呂二 叮紅

後味の悪い別れに星が散る
 行列は昔のままの音がする
 目つむれば昔のままの同窓会
 会えばまだ昔のままの二人です
 つまずきの少い泥に生きる幸
 水郷の町もヘドロに組む予算
 泥だらけになって強い事が言え
 川柳ささやま 河原みのる報
 古びたる日記意外な過去を知り
 朝刊の意外な記事に汁が冷め
 病室で読みくたぶれた週刊誌
 診察へ毒になるよな週刊誌
 真実も少しは混え週刊誌
 報恩の涙は弟子がこぼさせる
 大学の藍より出で赤い弟子
 伝統の秘芸伝える弟子がない
 英会話に神妙な弟子となる
 一言の甘さに毒の花を摘む
 太陽の甘みがにじむ一番茶
 臨月の甘えはすなおに聞いてやり
 甘い夜の吐息を日記うけとめる
 距離つめた女甘さを置いて去り
 甘いこと見せぬ親にある歩巾
 どんぐり川柳会 谷垣 史好報

登美也 みつこ 晃男 新雪 巡歩 快哉 晃男 千代子 枝葉 百合子 無聖 白峯 越山 みのる 宗珠 深月 孝住 可江 近江 文平 ゆう也 久子 好祐 憲祐 美幸 鬼遊 好郎 奈々 惠美子 重夫

安売りのレモンは風呂に浮いている
 男一匹メッキの道は歩かない
 狐と狸そんな二人でうまが合い
 一生を削げないメッキ夫婦坂
 おろかなる胸に十字架はメッキ
 いらまれの女冥利の血が騒ぐ
 紳士録メッキの名士ものせてある
 好きだから狸しっぽも隠さない
 メッキで装うても地金が地金では
 気づかつたレモンが減らぬ父の膳
 男装の麗人が飲むレモンティ

菜の花句会 高杉
 ゴキブリより始末の悪い貧乏神
 飲んでからの釣は見もせず握りしめ
 手内職貧乏神に追いつかれ
 こづかいがもう無い姉を脅そうか
 パパの約束何時もから手形
 ただ酒に貧乏神はよく喋る
 地獄絵のどの一と色も恐ろしい
 手形が落ちると急にねむくなる
 貧乏神に問えばおうちへ行くところ
 サングラス山河の線目に入らず
 愛想よい貧乏神で追いつけず
 ほじくれば脅迫になる種を持つ
 ふるさとの手形螢光がひかり
 千匹の馬が狂うと闇が来る
 兄ちゃんにおどかさされて球ひろい
 夏まつり貧乏神もゆかた着る
 情もろくパステルカラー似合うひと
 出し渡る奴から銭は先にとり
 脅迫に頑と動かぬ母の首

勝美 醉々 真砂 喜風 吸江 小松園 万里 鎮彦 瓢太 雅風 史好 頂留子 小松園 豊子 定男 美与子 寿馬 鬼遊 糸葉 菜 美狭子 美幸 昭子 醉々 弥生 信男 紀美代 千代三 柳太 夕花

そんなことして銭になりまのかと妻
 川柳化粧櫛 植村客遊子報 幸生
 満月の夜を邪恋の旅に出る
 陰口の本尊さんが来てあわて
 ついて恐い圧力かけて来る
 つかい捨てあわれにみえる紙袋
 習慣が色濃く残る山の里
 自惚れの脚線かがとが高過ぎる
 人生のつまずき旅へ出ていやし
 海へ挑む海女の白衣の気高くも
 満ち足りた顔は何もかも信じ
 サングラス外せば女瞳がきれい
 岸和田川柳会 植山 武助報 ころ
 みかんの花の甘き香歩巾狂わせる
 追いたてておいて野鳥よ来いと言う
 共稼ぎ妻は女の顔で出る
 出て見たいおもしろい夫婦のおもしろさ
 おかめひよとこそれでも仲のよい夫婦
 史跡行く姿も余裕の老夫婦
 婦唱夫随ときにはこんな夫婦です
 後方の内気な娘が見染められ
 内気まで父に似る子がいておしく
 長男に内気な嫁が来て平和
 珍客は僕の苦手な酒が好き
 足音をきいて金魚は餌を待つ
 川柳たけはら 森井 善居報 静水 蘭幸 政己 紫光

母の日に老母在りて善し五月晴れ
 あくび押さえて顔のない鏡
 蚊一匹仮眠に夏をつれてくる
 故郷はいまを盛り山の山つつじ
 ミルク飲つたこの子、無限の刻があり
 導火線欲つたままで恙なし
 一人三役春の行事がのしかかり
 土がなくなると土がなくなるとも水中花
 春風に勇気を運んできてももらい
 六法で話がかかぬこともあり
 眼鏡かけたらムズムズするお鼻
 何一つ聞いてはくれぬ海でよし
 金で買う戒名そんなもの要らぬ
 好戦の悪魔碑文を変えたがり
 プライドもお金も要らぬ歯がうずく
 桜花待たせておいて散り急ぎ

こうじ 文晴 鈍舟 房子 笑子 菁居 そのみ 不朽 千代美 節夫 小六 愛路 一 敬子

佳句地10選 (前月号から)

大坂形水選
 先頭のこけるのを待つねばりです
 臍独り愛嬌だけで生きてゆく
 休みたい足だましましつ歩く
 建の声夕日が沈んでから聞え
 海で増しの二階地震にもつやるか
 嫁がせて夫婦あらたな日々を組む
 妻と子を思い白旗振りつつけ
 カセットを返せば亡姉の咳きこえ
 一浪の砦となりぬ二階の灯
 海鳴りへ漁師脾肉の星の酒

醉々 寿馬 丑成 眉志 与呂水 花梢 武雄 聖地 新之助 百酒

京都塔の会

松川

杜的報

飽屑敷いて大工の飯になる
春の淡さをレモンテイの中にもみる

ある時ははなれて欲しい影法師
対立の思想に海峽白い波

海峽の霧はかさなる色になり
海峽をへだてた訛りがちがい過ぎ

海峽の向うに帰れない墓がある
もがく子を助けて輝る感謝状

人生を腕き通して酒がある
腕くだけ腕いてからの夫婦愛

六感のさはさはさすがに老刑事
こわい程六感のさえてる日

美人薄命六感の淋しい日
特ダネになる直感を記者は持ち

顔色で今日は一本余計付け
第六感ピタリ和尚は酒が好き

母と云う第六感はよく当り
城北川柳会

一泊に心浮き立つ友の顔
一泊でお墓参りのプランも立て

一泊に女、大きな靴もち
一泊の旅が限度と老いを知る

一泊の旅行家族ぐるみの楽しみを
電卓の答ソロバンで確める

突然の指名に答が出て来ない
精一杯の抵抗、行先答ええない

声援へバットで答えてホームラン
返答にタイムニングがいる拒絶

用意した答すらすらインタビュ
傷つける返答だからばけておく

紫香

美穂

明代

耕三

潮花

白溪子

求芽

三求

水客

杜的

弘三

客遊子

誠友

芳史

萬的
飛鳥
弘生報
ハルエ
ますえ
ふみ
秀村
一休
行有
テルミ
千子
きくみ
弘生
満津子
道子

寝冷えして朝飯食わず夫出かけ
孫の為、腹掛け送る里の母

ウルトラマン寝冷えに負けてハクション
重ね着し寝冷えを防ぐ老年期

寝冷えなど知らぬ飯場の高いびき
二日酔も寝冷えのせいと逃げておき

若氣から外れて処世の道を知る
南大阪川柳会

人ひとり死んで対策やつと立て
対策がもれたか雑魚もかららない

対策の蔭に逃げ道忘れない
傷口を聞けばそっくり似た運命

イミテーションと知りつつ貰う愛もある
そっくりの柄を見てから着なくなり

華麗な秘密持って女灯に浸る
秘密の数だけ鍵を持っている

秘密洩らすと白い刃が待っている
秘密など持たぬ夫婦で子が出来ず

十円が一枚多い手を開けず
果立つ子の夢に空あり海があり

果立つ子は一人で育った顔でゆき
果立つつ夜の母の枕も濡れて居た

果立つ子の重荷になり母の年令
果立つつ子の正礼にせぬ切り

団体の気安さ正礼にある度胸
団体になれば女にある度胸

婦人団体ようまあ口の動くこと
もたもたと聴えぬひがみ悔いている

もたもたの夫婦で長寿日々好日
川柳柳かやま

恒治

喜洗

人美

炳齋

右近

三十四

百酒

滋雀報

恒明

憲祐

滋雀

好郎

一二三

度子

君智
涼一
綾女
小松園
文秋
勝美
喜風
あいき
思月
萬的
久子
万里

分身を洗う幸福噛みしめて
新作に一つのドラマ鏝める

新作が母の祈りを抱いている
命ある句への陣痛まだ充たらず

新作の人形母の顔に似る
新作には二番煎じは許されぬ

墨汁が二番煎じは許されぬ
新作には二番煎じは許されぬ

風呂上がり人間らしい顔になる
何時ともとは違う静かな夫の風呂

新作へノミ一彫一彫にある言葉
手さぐりで歩んでこまで来た二人

新作の夏のドレスに着いたしみ
風に乗る噂何処まで行くつもり

手さぐりで歩いた暮しに色と味
新作と言わねばかりの値打つけ

定年となり手さぐりの道に入る
つむじ風男に生きたる歌がある

手さぐりの闇に心の灯が一つ
西宮北口句会

愚知聞いて欲しいコーヒー濃く入れる
揺り籠の夢の中まで風素直

入梅に蛇の目の傘はドラマだけ
ふと迷う心へ亡母の鈴が鳴る

うっ憤を流して欲しい雨を待つ
鍵つ子が見送る雨の迎え傘

恋人はコーヒーぐらいならと云う
俄雨柳へよけて虹を見る

無駄承知もう一度だけ念を押し
肩叩かれたばかりにコーヒーおこる破目

与史

善彦

千寿子

武雄

幸子

公子

英子

紀久子

凡九郎

天彦

恒治

光代

茂子

安代

紀川
白光子
千代
千世
子報
紅扇
メ女
喜世
喜女
泉女
豊子
薫風
正祐
八州
喜甲
伊山
伊升

コーヒーを少し残して待つ時間
 コーヒーへ一滴おとし老い若し
 干物を入れて一息雨の音
 盆梅の実一つ落ちて姑孤独
 雨だれに昔の音を聞いている
 雨しと身の上げなし長くなり
 音たてて秒針若き消してゆく
 うみなり川柳会(鳥取市) 小林由多香報
 しつかり者酒に浸って駄目になる
 父主導わが家の家憲まもられる
 自己暗示私に美人と言いきかせ
 これからはひとり生き抜く涙拭く
 我が胸のはころび理性が泣いている
 妻という殻破りたい倦怠期
 迷いみち易の暗示へすがりたし
 殻を破り蟬は自由の声を撒き
 外孫が障子破って叱られず
 治ったよほら治ったと撫でてやり
 スーパーの暗示は二円までである
 駄目で振る白い旗にもあるのぞみ
 妻の言う駄目は挺子でも動かさず
 駄目だなあと自分を責めて諦める
 チチキトク星が真北を指して飛ぶ
 恋に生きます島の錠を破り捨て
 指のない社長も同じ汗を拭き
 老社長情性のように実印を押し
 社長の眼鏡つく覇気は買っている
 駄目押しのように不渡りつかまされ
 堺川柳会 藤井一二三報
 銀行から出たため息が雨に遭い
 真先に酔うて本音に触れさせず

喜久甫 摩耶子 政甫 千世子 美代子 婦美子 総甫
 とみ枝 明子 江崎 天月 盛桜 雄人 笑王 華子 正生 熊生 葉士人 無し人 とし江 豊生 洋々 茶人 保子 長波 由多香
 好郎 小松園

この写真話せば長い事ながら
 鈴が鳴るようには本音云いだせず
 世話好きが娘の写真貸せ良い話
 恋人を小さく切って胸に吊ける
 ため息の中をダイヤ往き来する
 帰る日が明日にせまった母の顔
 ため息を叱って父もある悩み
 ぜいたくなため息ですと叱られる
 ため息をついてばかりで拂らず
 振袖の娘の写真持ち歩き
 十八のため息食べるものは食べ
 ため息の出そうな売場へ寄りつかず
 子の帰る日に赤丸のカレンダー
 お若いと云われ写真にけれながら
 ため息へ暮しずしずと下りてくる
 南海電鉄川柳部(大阪市) 辻
 ローカル線で故里へ帰ってみな踊り
 ローカル線無人の駅に柿がなり
 方言を聞くローカル線の暖かさ
 ローカル線ベン草が生えている
 ローカル線息切る客を待つてくれ
 ローカル線オバハン喋りまくって
 ローカル線お郷里訛りが派手になり
 トンネルにまたトンネルのローカル線
 立錐の余地なき初手水間客
 お別れのシーンローカル雪になり
 ローカル線禁煙なんか云いません
 錦鯉庭にゆとりのある邸
 その時は好いと思つた軽はずみ
 PTAで出しやばり過ぎて残る悔い 誓二
 川柳後案(岡山市) 井上柳五郎報

摩天郎 育園 与一 東雲 笑痴 徳子 千万子 宏子 柳影 ミツエ 邦晴 蘭生 弘生 嘉一郎 一二三 圭水報 摩天郎 小松園 柳信 勝美 雅風 恒明 東雲 川狂子 与一 宏子 圭水 綾女 ミツエ 誓二

悪友が領き合うてソツと立ち
 悪友のたまには為になる苦言
 悪友でなければ話せぬ胸のうち
 清濁を悪友あわせて吞んでくれ
 悪友の声を妻にも覚えられ
 悪友が尻をつめてつけしける
 漫画の目小さな嘘を見逃さず
 この世では聞けない声を漫画出し
 ルンペンも漫画読んでる遊園地
 母の来る気配で隠す漫画本
 横からの視線漫画をめくらせる
 寡婦として強気な女にしてしま
 あんまりの強気に地元そっぽ向き
 鏡台に強気の化粧薄くさせ
 強気でも好きな人には折れて見せ
 雑兵を強気の妻がけしかける
 子の笑顔金の無心と先を読み
 暮しにも金利と同じ巾で下げ
 貯金帖まず先祖に見て貰い
 寄付金の額が随意という高値
 川柳高知 川竹 松風報
 凡人で終り幸せだった人
 凡人でよし幸福な老いの日日
 押し売りへはり合う度胸夫がいる
 いざという時の度胸を女秘め
 受験期の子がカーテンの隅に居る
 カーテンの柄が豪華な窓にする
 不意の客あり下書の句を隠す
 孤に耐える女あじさい好きという
 真夜中のポストへ急ぐ恋がある
 内孫の宴をのぞくコイ織り

定平 宏大 ひろし 柳五郎 哲郎 恒洋 草風 久米雄 正道 昌吾 正志 幽谷 秋路 照友 博風 胡風 住治 梁太 廉太 佐加恵 幸恵 蟠蛇 豊栄 芽十 秋翠 海州 菊野 桂緑

父ちゃんの負正直なつづり方
 定年の貌挨拶をしそびれる
 あの人の花になりたい紫陽花よ
 花びらを写して悪人などいない
 農繁期らしく百姓罷がのび
 ふしつけな間い精力の事にふれ
 一票の私をくどく両隣り
 神経の隣りを羨む壁一重
 慶びの隣りを午後を休まされ

川柳しんぐろ

川上 大輪報

紅雨 節子
 美和子 よしみ
 柳市
 古三
 麗子
 松風

良縁が時々実家へ泣きを入れ
 パチンコ屋時々勝たす術を知る
 ママの留守時々くるう腹の虫
 句座楽し時々来たくなつた町
 この若葉何時かは風の恐さ知る
 若葉の雨でんでん虫が旅に出る
 青蛙の青清らかに若葉燃ゆ
 枯れる日は言わず若葉と父の靴
 毛虫いまだんよくなほど若葉喰う
 食卓に若葉を添えて初夏の味
 陽の恵み若葉は澄んだ色を見せ
 さわやかに若葉五月の陽をはじく
 新入社風爽五月の風を幼る
 フレッシュが一行で行く幼稚園
 フレッシュな若さ爆弾抱いている
 フレッシュな笑顔にムード変えられる
 カラオケでひととき歌手の夢を見る
 カラオケに追いつ追われつ唄う父
 カラオケが僕の本心知っている
 音痴だがカラオケという助け舟

倉吉打吹川柳会

奥谷 弘朗報

寿子 英子 冬花

真実は一つ横槍はうけつけず
 鍛洗う悔いない今日が夕映える
 コップ酒位は飲める小銭入れ
 今だから話すスクープ裏の裏
 座して半畳寝て一畳それで足る
 結び目がよじれた様な夫婦仲
 盃を重ねて胸の奥のぞく
 特大の売場やっぱり気が引ける
 久方の茶席の客で肩がこり
 人生に第二があつて然るべし
 あいづちを打って汲み出す聞き上手
 生きぬいた空気へ国宝鎮座する
 飛び石が日本を留守にさせる春
 注文も聞かず好みを出す女将
 結び目の母だと分る送りのもの
 顔触れを見てスタートでもう弱音
 のんびり型教育ママを手こずらす
 こきつけた三三九度の結び昆布
 柏餅作れる平和な村でよし
 和歌山七面句会
 取れかけた釘嬉しい世話を焼き
 傷ついた心と心に灯がともり
 傷心へ妻の一言蘇える
 恍惚はズボンの釘はめ忘れ
 毎日が傷の世界にいるわたし
 傷つけぬ傷つけられぬ船となり
 前釘注意されるも年ですな
 傷心の旅に降り立つ無人駅
 へそまがり逆う方もへそまがり
 社長バカ専務専務はへそ曲り
 大胆なポーズ臍にもある器量

舍人 虎秋 登美也 紫泉 千重子 御前 宗則 俊子 民子 竹馬 自然 雄々 独歩 柳風 夕路 車楽 弘朗 三幸報 宣子 三幸 晃治 昌三郎 勇次 晶子 知也 智水庵 寿子

青春の心の傷はいえさらず
 胸の傷りう散る季節にまたうずき
 子の頭同じ傷あとなげし夫
 青春の傷を自慢の父眠る
 休日だけ早起きをするへそ曲り
 笑うへそ貧乏へそ生まれつき
 水着ショー臍にも個性ありました
 臍曲り時には素直に異なる握手
 山家にも七ツボタンの遺影あり
 虹川柳俱樂部(唐津市)新岡回天子報
 棟梁に素直に打たれる五寸釘
 年上の女の訣れ陽が沈む
 駆け足の世界に歩いて旧い道
 水持って来る台風玉が待つ
 大豆豊作黄色いごはんまた食わせ
 丹せいに育てた花を摘みとられ
 釘一本足らず間抜けた人に見え
 変人と言われる人が賞を受け
 うすい緑の椀へ釘を打ってやる
 氷水暑さしのげず汗ばかり
 式だけは出来て答の出ぬ社会
 晩に会う電話かけおく二人仲
 三井ヶ丘川柳会 高田 博泉報
 二十坪我が土地にして夢終る
 紫陽花が生き生き見える梅雨最中
 採めている土地とは見えすかきつばた
 命令へ記憶喪失症となる
 吾子が泣くけさもまぶしい薔薇あかり
 反対反対をせなけりや野党でないみたい
 ペヤチンコにする一言が妻にあり
 おごそかにドラマ始まるご来光

秀市 わか 悦子 宏子 富子 淳子 隆恵 周穂 五木 ひろ坊 実光 岩一 勝浪 紫中 一竿 愛郷 拘治 虹汀 回天子 光夫 洋茶 小坂園 弘生 勇三郎 鬼遊 三千子

一坪の分だけ貯金出来ている
 子育ての勲章ベチャンコの乳房
 土地コログシ税金で皆とってやれ
 パチンコのマーナは死ぬと言つていず
 海鳴りが男に許す須臾の閑
 着飾らぬ土地の言葉で迎えられ
 世をすねた吟遊詩人に土地はない
 この土地に移って隣人愛を知り
 命令を聞かぬ少年の意志固し
 国訛り土地を捨ててもついで来る
 酒呑んでからみだすが父のくせ
 スリッパの素足から梅雨明けしてくる
 ベチャンコのポストで機密タイプ打つ
 同窓会ほぼ真ん中にある安堵
 命令は自由の女神の胸を刺す
 僕・私・俺それぞれ顔を持つ
 命令に馬鹿者が居てひとり死ぬ
 最晩年充実紫陽花濃紫

川柳大阪 児島与呂志報

鈍行も緻密なダイヤ狂わさず
 一人居の女にやすらぐオールド
 叮嚀に音を残して行く鈍行
 晴耕雨読過去に裏口ありました
 裏口に西瓜を下げた友が来る
 日本を箱庭にして空の旅
 裏口へ廻れば話の分る人
 集金の顔裏口で吠えられる
 一円が値うち知つてる音で落ち
 近所の噂うちのアンテナへすぐ入り
 鈍行は抜かれて耐えて地図眺め
 ふんだんに水が使える有難さ

野生 あいき 三郎 正面子 酔々 亜鈍 江留美 亜成 一念 亜也子 寿馬 惠美子 好郎 晴風 凡九郎 小路 薰風 比呂志 眉水 重人 醉々 佳加志 道子 九平 真佐志 誓二 秀峰 漁人

親だけが箱入り娘と思うてる
 合槌をうって淋しく死ぬ話
 アンテナが一本過疎の耳守る
 俄雨鈍子の追加まだやまず
 アンテナを亭主の背なに付けない日
 一生を下積みでいてつづがなし
 日々とうとくだだけ働けば楽しくて
 オースケール川柳会 大坂 形水報
 御堂筋五月の風はピンク色
 楽しみは子供の声のする我が家
 割勘の財布の中を覗かれる
 大人へと脱皮を急ぐ肉体美
 悪友と覗く暗号ストリップ

満津子 胡蝶 美幸 希久志 本蔭棒 三十四 与呂志 諸岡 健坊 野生 岳麓

覗かれる秘密も無しに日日好日
 せがまれて下着売場を覗く父
 長期不況陣形を組み直し
 背が高いばかり覗いていると言う
 トンネルの出口が見えた一人旅
 人だから覗けば香具師と会う視線
 子供から敵しい父を望まれる
 階段を落ちて子供は成長す
 風起こす男が社運握つてた
 新婚を覗くと二人で出るところ
 シャボン玉子供が吹くとよくふくれ
 石庭の椽に座つて知つた風
 着飾つて心の傷を覗かせず

栄光 有一 博泉 一扇 亜也子 一念 聖地 亜成 形水 弥生 好入郎

大坂形水著

川柳谷町

序 中島 生々庵
 跋 藤村 青一
 編集 不二田一三夫

発行所 大阪市南区鯉谷中之町二〇
 川柳塔社

丁稚から社長へ―立志伝中の人であり、そこに生きた川柳がある。あなたの本棚にゼヒ一冊を！
 (頒価千五百円・送料共)

▼句集「谷町」好評発売中▲
 ▼淡路新聞―人柄の良さと、生活のヒダのある句―(佳句を紹介)
 ▼メンズ・デイリー社―「評論」で紹介された。
 ▼大阪新聞―川柳句集が紹介されるのは異例

のことである。(8月20日現在)
 ▼雑詠提出の用紙▲同人吟の部でも規定を守つてくれない人が三人。本誌と同寸法の型にするのがどうして出来ないのか。ご協力ください。水煙抄の方々も用紙はかならず、規定の寸法を守ってください。

本 社 川 柳 忌 句 会

日 時 九月七日(木) 午後六時
 会 場 金 属 会 館

南 区 鯉 谷 東 之 町 10 番 地
 地 下 鉄 堺 筋 線 長 堀 橋 下 車 東 ス ぐ
 電 話 2 7 1 ・ 3 9 3 5 番

兼 題

席 題

「緒ぐ」 児 島 与 呂 志 選
 「着眼」 岩 本 雀 踊 子 選
 「柄」 戸 田 古 方 選
 「柄」 大 坂 形 水 選
 各 題 三 句 以 内 嚴 守

★ 投 句 だ け の 方 は 切 手 百 円 封 入

★ 電 話 で の 投 句 や 訂 正 は ご 遠 慮 願 い ま す
 大 阪 市 南 区 鯉 谷 中 之 町 20

川 柳 塔 社

11月の兼題 「榊」 「力仕事」
 「釣合い」 「不敵」

・ 募 集 ・

十一月号発表表 (9月15日締切)

川 柳 塔 (10句) 西 尾 栞 選
 水 煙 抄 (10句) 正 本 水 客 選
 愛 染 帖 (3句) 橘 高 薫 風 選
 課 題 吟 (各題5句以内)

「宮詣り」 岩 田 美 代 選
 「祝 日」 加 藤 貞 山 選
 「ノルマ」 岡 村 久 志 良 選

★ 川 柳 塔 欄 の 投 句 は 本 社 同 人 に 限 り ま す。
 ★ 用 紙 は な る べ く 柳 箋 を ご 使 用 くだ さ い。

十二月号発表表 (10月15日締切)

川 柳 塔 (10句) 西 尾 栞 選
 水 煙 抄 (10句) 正 本 水 客 選
 愛 染 帖 (3句) 橘 高 薫 風 選
 課 題 吟 (各題5句以内)

「晦日そば」 高 橋 夕 花 選
 「集 金」 野 田 素 身 郎 選
 「冬」 山 内 静 水 選

★ 原 稿 は 四 百 字 詰 原 稿 用 紙 に 四 枚 以 内。 文
 字 は 楷 書 で 新 か な づ か い に し て くだ さ い。

川 柳 塔 社 常 任 理 事 会 (8月4日)

と にか く 暑 い。 冷 房 の 効
 いた 喫 茶 店 だ け が オ ア ン ス
 と い う 大 大 阪 だ。 今 日 の 出
 足 は 悪 い だ ろ う と 思 っ て い
 た が、 や っ ぱ り 出 席 す る 人
 々 は 遠 近 に か か わ ら ず 顔 を
 見 せ て くだ さ っ た。 10月22
 日 の 大 阪 文 化 祭 川 柳 大 会 に
 兼 題 選 者 と し て 大 路 美 幸 氏
 が 登 場 さ れ る が、 こ れ は 川
 柳 塔 社 同 人 と し て で なく、
 天 守 閣 の 同 人、 と し て で あ
 る。(他社から三人も選者 夫々庵・小松園・岳人・一三
 夫(敬称略))

常 任 理 事 会 は 9月4日 5時 か ら

定 価 四 百 円 (送 料 29円)

半 年 分 二 千 五 百 円 (送 料 共
 一 年 分 四 千 八 百 円 (送 料 共

昭 和 五 十 三 年 八 月 二 十 五 日 印 刷
 昭 和 五 十 三 年 九 月 一 日 発 行

大 阪 市 南 区 鯉 谷 中 之 町 二 〇 番 通

編 集 兼 発 行 人 中 島 蓬 太 郎

印 刷 所 藤 原 童 心 社

郵 便 番 号 5 4 2

大 阪 市 南 区 鯉 谷 中 之 町 二 〇 番 地

發 行 所 川 柳 塔 社

電 話 大 阪 ・ 二 七 一 一 三 九 八 五 番
 振 替 口 座 大 阪 ・ 三 三 三 六 八 番

・ベンペン草・

葎乃先生から

★ 濱ぎる（35度前後の暑さで、たぎる、とはオーバーだが）よくな今夏の毎日にはウンザリしてしまう。こんな或る日、生駒の葎乃先生からお便りをいただいたが、まずご筆跡のたしかなこと、ケイのない用紙へ左寄りに下がらない文面など、ご健勝であることをご報告しておきます。葎乃先生も夏きらいには有名。葎乃――扇風機の風のきらいな

カック
(脚気)
肉体疲労時の
ビタミンB₁補給に
アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



タケダ

私は秋が来るまでどうして過ごそうかと気をやんではいます。

★ 日によつては24時間ブツブツに扇風機にあたってゐるほどのほうが、いくぶんか涼をとらせてもらつてゐることになる。

――私は時折、寝床をはなれて狭い部屋を行つたり来たりして、動物園の熊みたりに、歩行練習をしていま

▼ 葉子コーナー

▼ 暦の上で秋を告げても残暑はきびしく、季節が逆戻りしているような錯覚にとらわれる。でも、日が沈み夕闇がたちこめると急に秋の気配が漂ってくる。季節は着実に移つてゐるのです。

▼ 家々の灯が、何か人懐かしく、秋の空気がさわやかなせいか、冷たく輝くにもかかわらず、一家団らんを感じが強い。

▼ 風雅の道と縁遠い私も秋になると何となく物のあわれを感じるのです。古来、日本人は虫の声に秋の哀れを感じさせられてきました。

す。まだ近くの散歩道も一人で歩けないのです。

★ こと足の話になると、ぼくなど旅行するにもすつかり自信を失くしている。若い頃に相撲で鍛えた足腰だったのに。

――おとなしく焦熱地獄の亡者になった気で暮らします。但し夢だけは見逃したくないのです。

★ と、いまだに夢を追う少女のような葎乃先生の精神力は旺盛です。

精神年令

★ 本田恵二郎氏が前号に書いておられるように、川柳によつて精神年令を下げているとか。それはそうかも知れない。老いて恋の句もまたよしであるが、人によつては、いい年をしてイヤらしいとみる向きもあるようである。そうカタイごとを云いなさなナと申しあげたい。かと云つてそれを私生活にまで染めてしまつては問題が残るであろう。

★ 七月からS新聞の「サンデー読切小説」を月二本書かせてもらつてゐる。月四本出るうちの二本が拙作になるわけだが、いずれもポ

ルノものばかりである。しかも一年以上もつづいてゐる「女子高生ブルース」のシリーズものである。よつほど精神年令を下げぬと書けないシロモノだが書かせてもらへるうちが花なもので、目下現代ポルノを研究中だといへば、イヤラシイやつだと思いでございませうが、マジメ人間の僕（昔はともかく）にとつては、苦しい修業なんぞござ

何を選んでいただくかは先様におねがいして

タカシマヤの商品券をお贈りするのにも 心に

くい贈物かと存じます

1000円から
10000円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



高島屋

★ 若がえる受賞句のこのねがいは選者も句者も同じである。うちの場合は絶対公

★ まだまだ暑い日がつづくようです。皆様のご健康を祈ります。

(不二田一夫)

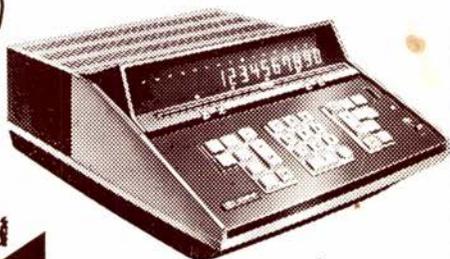
平であるが、他の世界では時によつては自分が目をかしている人に賞をやつてしまふことがある。ほくもこうした事実は何度も直面したことがある。

――川柳のような小さな世界で、このような受賞パニックが起こらんか、それがそのまま川柳を衰微へみちびくことになるだろう。

★ われわれは選者を信頼しよう。



タッチでえらべば
 やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
 平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
 16ケタ2メモリー高級品
SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

〈ホテル・旅館〉

- | | | | |
|----------------------------------|----------------------------|-----------------------------|----------------|
| 白浜温泉——忘れえぬ
政府登録国際観光ホテル | はまゆうの宿
ホテルパシフィック | 徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 | 鳴門 |
| 政府登録国際観光旅館 | 朝日 | 政府登録国際観光旅館 | 鳴門公園ホテル |
| 勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 | 中の島 | 紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 | 紀の川苑 |
| 湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 | 湯の峯荘 | 大阪・泉南淡輪——魚つりに
観光旅館 | 淡の輪苑 |
| 和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 | 萬波 | 大阪・なんば——清楚で近代的なホテル | ホテル南海 |

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
 サービスチェーン大阪案内所
 ☎06-631-0222



南海電鉄